

宇都宮の民俗



宇都宮市教育委員会

表紙写真

飯山の獅子舞

(宇都宮市指定無形文化財)

序

文

宇都宮市は、今日、県都として、さらには北関東を代表する大都市として発展を続けています。

しかし、このような都市化の進展は、市街地は言うに及ばず市の周辺でも旧来から引継がれてきた伝統的な生活様式、風俗習慣等を消失させつつあります。

そこで、本教育委員会では、これらを記録として残す必要から、本格的に民俗資料の調査に取り組み、昨年度は「古民家調査」を実施し、今年度は「伝統的手仕事調査」を、来年度以降は「祭礼調査」・「民俗芸能調査」等を実施する予定であります。

今回、発刊いたすことになりましたこの「宇都宮の民俗」は、人々の記憶から忘れ去られようとしているこれらの民俗資料について概観したものであって、前述の調査結果の集録等と相まって、宇都宮の民俗資料の集大成の一部をなすものであります。

調査・編集にあたりましては、県立郷土資料館長の尾島利雄氏、同館指導主事の柏村祐司氏、並びに宇都宮郷土研究会の皆さまに貴重な御指導と御協力をいただきました。

厚くお礼申し上げます。

本冊子は、不備な点が多々ありますが、一応、宇都宮の民俗のあらましはつかめると思いますので、市民の皆さまの手引きとして、あるいは、研究のための基礎資料等として広く活用されれば幸いです。

昭和53年7月

宇都宮市教育委員会

教育長 後藤 一雄



目

次

序	宇都宮市教育委員会教育長	後藤 一 雄
監修者のことば	栃木県立郷土資料館長	尾 島 利 雄
まえがき		4
1、総 観		5
2、住 居		9
3、食 事		14
4、衣 類		19
5、生 産		22
6、運搬・交易		29
7、社会生活		33
8、信 仰		38
9、人の一生		45
10、祭りと年中行事		49
11、民俗芸能		58
12、歌 謡		62
参考文献・注		71
あ と が き		74

文化財愛護シンボルマークについて



このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗供のイメージを表わし、これを3つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

監修者のことば

「民俗」ということ

栃木県立郷土資料館長 尾 島 利 雄

近年、民俗文化財への関心がとみに高まり、マスコミなどでも、連日「民俗」ということばがとりあげられている。

ところが、いざ「民俗」とは何かというと、答えられない人がかなりいるようである。「民俗」とは典型的なもので、集団によって支えられくり返しくり返し行なわれてきたことがらをさすことばであり、民俗学とは、長い間伝承されてきた民俗資料（例えば風俗習慣）を広くしかも数多く採集し、それを比較研究整理して、一国の文化、特に基層文化（庶民の生活文化）を究明する学問とされている。

従って日本民俗学とは、簡単にいえば、名もなく貧しく美しく生きた日本の庶民の生活文化を調べる学問なのである。

こう考えてくると民俗資料とは庶民の生活文化を支えてきた資料であり、この庶民の生活文化財ともいうべき有形無形の資料は、かつての日本の基層文化を形成していた庶民層の生活文化を究明するために欠くことのできないものであると同時に、現代社会の成立を知る上でも重要な手がかりとなるものということになる。

さらにつけ加えるならば、今に残された古き民俗伝承の中には、私たちの未来を考える上で参考になることもかなりの数存在する。

一昔前は、一部に「愚民のタワゴトを聞いてそれを歴史なりとするなど笑止千万」などという声もあったが、今は、そんなことをいう人はほとんど影をひそめてしまい、民俗調査の重要なことが、一般人にまで広く浸透しつつある。

今回宇都宮市教育委員会から市内の民俗をまとめた報告書を出したいので、監修の労をとってほしいとの要請があった時、これをひきうけたのは、この仕事が、栃木県の文化財の保存と伝承に役だつとともに、宇都宮市民はもとより一般県民のふるさと理解にひえきするところ大なるものがあると信じたからである。

この民俗の小冊子が、各方面で活用されんことを祈りペンをおく。

まえがき

本冊子は、栃木県が昭和52年度実施の「緊急民俗文化財分布調査」の際その調査対象地となった、宇都宮市の新市域9地区（野高谷、屋板、東木代、下川俣、西田中、坂本、大網、下欠下、羽牛田）と独自に調査した2地区（鶉内、中篠井）の調査結果と、市教育委員会が数年来調査を行なった民俗関係の資料及び県立郷土資料館、下野民俗研究会等が刊行している民俗関係の研究物の成果を含めてまとめたものです。

52年度行なった11地区（調査地区の概要は、本文の「1、総観(4)」に記した）のうち清原地区の野高谷町と瑞穂野地区の東木代町の調査は、宇都宮大学民俗研究会があたりまして、他の9地区は、編集も担当した下記の宇都宮郷土研究会員5名の各位が調査しました。

本冊子を編集するにあたりましては、監修を県立郷土資料館長の尾島利雄氏にお願いすると共に同館職員御助言を受け、市教育委員会社会教育課長以下、次の者が編集に関する仕事にあたりました。

なお、各項ごとに記しました解説は、県立郷土資料館指導主事の柏村祐司氏に執筆をお願いしたものです。

●監 修

尾 島 利 雄（栃木県立郷土資料館長・宇都宮大学講師・同大学民俗研究会顧問）

●解説執筆

柏 村 祐 司（栃木県立郷土資料館指導主事）

●編 集

◎半 田 昭（宇都宮市教育委員会社会教育課長）

横 山 和 夫（宇都宮市立宮の原中学校教諭・宇都宮郷土研究会員）

阿久津 義 正（ " " " " ）

真 壁 敏 夫（ " 姿川中学校教諭・ " ）

谷 島 利 康（ " 雀宮中学校教諭・ " ）

河 越 昌 司（宇都宮市教育委員会社会教育課文化振興係長）

○定 岡 明 義（ " 文化振興係主任主事・宇都宮郷土研究会員）

桜 井 敬 朔（ " " ）

松 沢 清一郎（ " 文化振興係主事）

〔◎編集責任者、○編集主任〕

1、総 観

(宇都宮市) (宇都宮市) 宇都宮市 (宇都宮市)

(1) 地 理

宇都宮市は、栃木県のほぼ中央、東京から北100キロメートル余りに位置し、北に那須・高原、北西に日光、南東に筑波の各連峰をのぞみ、更に、東に鬼怒の清流がみられ、関東平野の広大な沃野がひらけ、美しい自然環境に囲まれている。

市の中心部は海拔117・1m(市役所所在地)、戸祭山、八幡山の連丘が南北にのびて、上町・下町の境をなし、市街地を形成し、西北は大谷・古賀志・鞍掛の丘陵が起伏している。しかも、この付近は、絶好の市民ハイキングコースとして整備されているほか、市民の憩の森林公園の造成も進められている。

市中を流れる河川は、東に鬼怒川、中心部に田川、西に姿川の3河川が貫流し、各河川の流域には水田地帯が広がり、本市農業の基盤を形成している。

気候は内陸性で寒暖の差の激しい地域に属し、暴風雨等の自然災害は比較的少ないが、雷は北関東の名物といわれるほどである。

(2) 歴 史

宇都宮の歴史が明らかになるのは奈良時代からであり、上古の様子は定かではない。奈良時代にはいと東北経営の拠点となり、更に二荒山神社の門前町として栄えただけでなく、奥州に通ずる街道沿いの宿駅として発展してきた。

その後、平安時代以後宇都宮氏が22代にわたって当地方を支配し、宇都宮城が築かれてからは、その城下町として繁栄を続けてきた。江戸時代になると日光東照宮が建立され奥州・日光両街道の分岐点として益々その重要さを加えるに至った。

明治維新の戊辰戦争と第2次世界大戦の2回にわたって宇都宮の市街地は戦禍にあったが、今日、県都としてばかりでなく北関東の代表的都市に成長しつつある。

現在の市域は、市街地となっている旧市内と昭和29年に宇都宮市に合併された周辺の11ヵ村からなっており、この11ヵ村のほとんどは現在新市内と呼ばれ、急激な都市化が進んでいるが、一応、農村の形態をとどめている。

(3) 人口の推移 (各年10月1日現在)

注-①

地区別	大正9年	大正14年	昭和10年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和50年
総数	123,789	140,973	156,265	210,046	227,153	265,696	344,420
旧市内	63,711	76,138	87,129	97,075	127,169	162,559	186,437
清原	6,060	6,129	6,528	9,750	9,842	9,055	11,701
平石	6,364	6,784	7,462	10,263	10,115	14,084	23,454
横川	4,964	5,026	5,450	11,815	7,092	10,964	15,496
瑞穂野	4,972	4,798	4,923	6,505	5,735	4,978	5,458
豊郷	5,153	5,524	6,688	9,501	6,966	7,758	16,521
国本	6,736	7,614	8,448	11,318	5,124	4,949	6,869
城山	9,843	11,436	11,719	13,201	13,630	13,757	17,352
富屋	3,022	3,091	3,052	3,818	3,566	3,291	5,242
篠井	※2,620	※2,663	※2,886	※3,621	3,516	3,128	3,152
姿川	6,063	7,363	7,034	13,131	9,085	14,249	28,812
雀宮	4,221	4,407	4,946	11,048	15,313	16,944	23,953

※は分村合併のため、昭和25年の割合によって算出。

(4) 調査地区の概要

※ここで扱う調査地区とは、昭和52年度に民俗調査を実施した宇都宮市の11新市域の中からそれぞれ1ヵ所抽出したものである。

① 位置



番号	地区
①	野高谷
②	鶺鴒内
③	屋板
④	東木代
⑤	下川俣
⑥	西田中
⑦	坂本
⑧	大網
⑨	中篠井
⑩	下欠下
⑪	羽牛田

②概 観

番号	地区	概 観
①	野高谷 (清原)	宇都宮の東端、鬼怒川東岸の台地上に位置し芳賀町に境を接しており、集落は柳田街道の北側に南北に並んでいる。
②	鶉内 (平石)	旧平石村の北端に位置し、耕地のほとんどが、水田であり、西側の台地上に広がる工業団地と対象的な景観である。
③	屋板 (横川)	旧横川村の行政の中心地で、今日も市役所の出張所、郵便局、学校等が集中しており、新興住宅地化が進んでいる。
④	東木代 (瑞穂野)	鬼怒川西側の川岸に開けた水田地帯に位置し、開発は進んでおらず比較的純農村の姿を今日も止めている。
⑤	下川俣 (豊郷)	羽黒街道と白沢街道に挟まれており、西部の本田と東部の新田の集落に分かれ耕地はほとんど水田になっている。
⑥	西田中 (国本)	鞍掛山の南東に位置し、山ふところ深いところに集落が分布している。
⑦	坂本 (城山)	大谷の入口で、大谷石の採石場がみられ、集落の半数以上の家は大谷石に関係ある職業についている。
⑧	大網 (富屋)	高館山ろくの南北に集落が位置し、集落東側に広がる水田のまん中を田川が流がれている。
⑨	中篠井 (篠井)	集落の位置は、三方山に囲まれた盆地状で、西側の一段低いところには水田が広がっている。
⑩	下欠下 (姿川)	宇都宮市の西部を南北に流れる姿川の東部に位置し、集落の周囲は水田がよく開けている。
⑪	羽牛田 (雀宮)	国鉄雀宮駅の東側に位置し、集落の周囲には、整然とした水田が広がっている。



⑤地形図

①野高谷



②鶺内



③屋板



④東木代



⑤下川俣



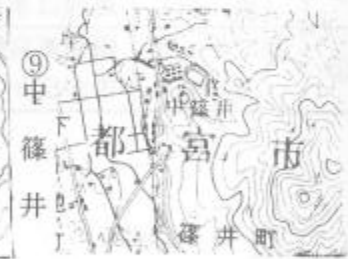
⑥西田中



⑦坂本



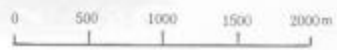
⑧大網



⑩下欠下

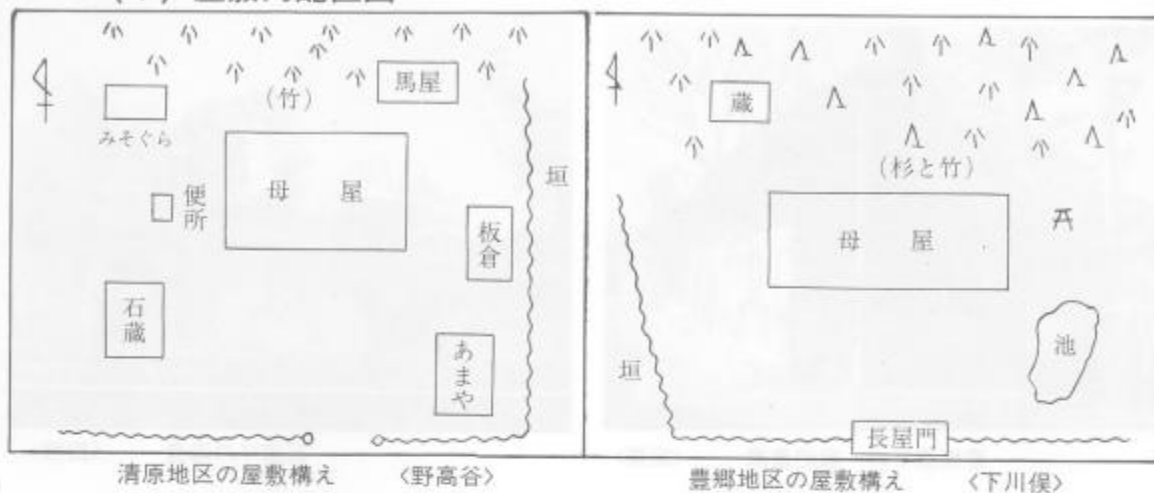


⑪羽牛田

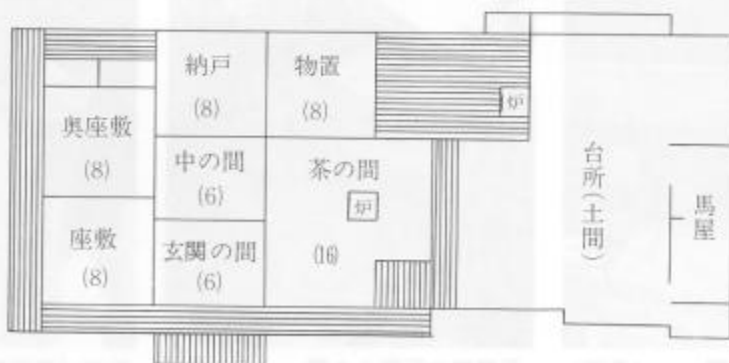


2、住 居

(1) 屋敷内配置図



(2) 間取図



(3) 母屋



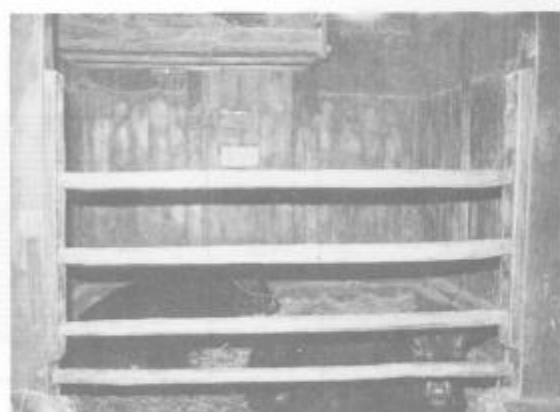
寄棟造りの一般的農家 <新里>



石造りの母屋 <西根>



いろり <岩曾>



小牛の飼育に利用している旧馬屋 <岩曾>

(4) 付属屋

注-②



豪農の長屋門 <長岡>



石屋根の石蔵と土蔵 <岩曾>



氏神 (篠井神祠) <中篠井>

(5) 調査報告

①母屋

屋根型		屋根材		
寄棟	入母屋	むぎわら	かや	
①～③、⑤～⑪	④	①～⑦、⑩、⑪	④、⑤、⑧、⑨	
部 屋	名称	呼び名	用途	床・置物等
	勝手	カッテ①～⑨、⑪ゴハンバ①カッテバ⑩	食事①～⑪調理⑤、⑦⑪	板の間①～⑪
	茶の間	チャノマ①～⑪	客の接待①～⑪寝間⑦	畳①～⑪いろり⑦神棚・仏壇①～⑪
	納戸	ナンド①～⑪	若夫婦の部屋①～⑪産室①～⑪	畳①～⑪たんす①～⑪鏡台③
	座敷	ザシキ①、③～⑪ヒロマ②	客間①～⑪	畳①～⑪床の間①～⑪
	台所	タイドコロ②～⑨、⑪デイドコロ⑩ドマ①	屋内作業①～⑪	土間①～⑪
	馬屋	ウマヤ①～⑩ウマゴヤ⑪	馬・牛の小屋①～⑪	土間①～⑪

②いろり

いろりの呼び名		自在かぎ	
上いろり	下いろり	呼び名	材質
上いろり①上ロ②イロリ③～⑪イリリ⑩	下いろり①イロリ②、③、⑤	カギツルシ①、③、⑤～⑨カギジルシ④、⑩、⑪カギツルシ②	竹①②④⑨～⑪縄⑤⑧
座名		主 人	主 婦
座名		ヨコザ①、③、⑥、⑦、⑨、⑪ムカイヨコザ②ムケイヨコザ⑤、⑧、⑩	ワキ②
		下 座	ギジリ⑤～⑨キジロ①、②、⑩、⑪

③かまど

かまどの呼び名	かまどの神の呼び名	呼び名
カマド①、⑤、⑧、クド①、②、⑩、⑪ ヘツツイ①、③、④、⑥カマクド⑨	カマドサマ④オカマサマ②、⑤～⑨、⑪	イドガミ①～⑦、⑨ ～⑪スイジングウ⑧

④井戸神

⑤屋敷林

呼び名
モウソウノヤブ①セドヤマ⑥⑧⑨ ヤシキヤマ②
樹 種
タケ①②④⑤⑧⑩スギ①～③⑥⑧ ⑨⑪カシ②ヒノキ③ケヤキ⑧⑪

※調査地区

- ①野高屋(清原) ②鶉内(平石) ③屋板(横川)
④東木代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(6) 解 説

母屋について見ると、屋根型はほとんどが寄棟で、入母屋がわずかに一例ばかり見られる。ここで取りあげた母屋は、農家を対象としたものであり、したがって長らく自給自足の生活を旨としてきた農家にあつては、屋根材を身近な所にある草などにたよらざるを得なく、いきおい構造が簡単で草の葺きやすい寄棟型となるのである。入母屋型は、普通社寺などに用いられるもので、一般民家に用いられるようになったのは、最近になってからである。

屋根材は草材が圧倒的に多い。耐久力からみると茅が一番であるが、耕地が開け茅場をもたない所では、裏作の小麦柄を用いている。茅を用いているのは、東木代、下川俣、大網、中篠井であるが、この地はいずれも台地や丘陵、山地が広がる所である。なお、今回の調査では明らかにならなかったが、鹿沼と接した地域ではかつて大麻を栽培していたことから麻柄（土地ではオンガラという）を下地に用いている例がある。

さて母屋の間取りであるが、本市の場合は大別するとカッチェとかチャノマと呼ばれる、ひととき大きな部屋を中心に、ナンド、ザシキが配列する広間型と、ほぼ同じ広さの四部屋が配列する整形間取り田の字型とが見られる。栃木県の場合、北部は東北型間取りといわれるヒロマ型、南部は西南日本型間取りといわれる整形間取りとが二分し、本市を始めとする県中部はちょうどこの二つのタイプの間取りの混在する所となっている。

次に各部屋の用途について見ると、広間型の場合カッチェあるいはチャノマと呼ばれる部屋は日常生活の中心の場で、食事、家族の居間、客の接待など広い用途を持っている。これに対し整形間取りの場合は、これらの用途がカッチェ、チャノマの二部屋に分化される。ナンド、ザシキは間取り型による用途の違いは見られない。本市の場合ナンドは、若夫婦の寝室、産室にあて、ザシキは結婚式や葬式などハレ（晴）の日の式場や客の寝室として使用される。

次にイロリについて見ると、本市の場合両間取り型とも上イロリ、下イロリの2つあるのが普通である。上イロリは広間型の場合カッチェやチャノマと呼ばれる部屋と、台所に張り出した板張りの所に設けられるのが普通である。一方整形間取り型の場合は、食事、家族の居間であるカッチェと同じく台所の板張りに設けられる場合が多い、座名については、上・下イロリとも戸主の座と下座についてのみの伝承が残っているのが一般的で、鶉内地区に主婦の座（ワキと呼んでいる）が伝承されているのはむしろ例

外的である。戸主の座はヨコザ、ムケイヨコザ(ムカイヨコザ)と呼び、一方下座の場合はキジリ、キジロと呼んでいる。なお下座の場合、普通はここは若嫁の座である。イロリで使われる用具には、自在カギ、金輪、火棚などがある。自在カギの名称はカギツツルシと呼ぶのが多く、次いでカギジルシ、カギヅルシがある。材質は孟宗竹に木製の棒を通し、先端にカギをつけ、魚の形をした木製の調節具をつけたものが多く、その他ナワを用いたものがある。

カマドには飯炊き用のものと、馬の水わかしあるいはミソ炊き用の大型のものとの二つが設置されているのが一般的である。飯炊き用のものは釜が二つ並列してかかるもので、大型のものは一つだけのものであり、ここで使用する釜はオオガマとかマガマと呼ばれる大釜である。カマドの名称は、カマド、クド、ヘツツイ、カマクドなどである。なお、カマドの材質であるが、古くはネバ土をかためたものが多かったが、やがて大谷石製のカマドが普及した。

カマドの付近には、カマドの神様を祀っているのが一般的である。カマドの神は一般にオカマサマと呼ぶ所が多いが、東木代地区ではカマドサマと呼んでいる。カマドを司どる神であるところから火防の神としての信仰を持つが、市内でもかつては小正月に沢山の作り物を供えたり、また今でも田植え終了後、あるいは稲刈り後に苗や稲を供えたりすることからすると、作神的な性格をも持ちあわせている。

井戸はかつてはハネツルベや車井戸が一般的であった。また北部から西部にかけての山沿いの所では、井戸のかわりに飲用水の取得に沢水を用いた所もある。井戸の所には水を司どる神を祀っていたもので、これらをイドガミとかスイジグウと呼んでいた。

冬の季節風の強い本市では、母屋の背後に屋敷林を持つのが一般的である。これをモウソウヤブとか、セドヤマ、ヤシキヤマなどと呼んでいる。樹種はタケ、スギが圧倒的に多く、ついでケヤキ、カシ、ヒノキとなっている。モウソウヤブは文字通り孟宗竹を主体とした屋敷林で、また本市内の豪農の中にはヤマと呼ぶにふさわしい、うっそうとしげった屋敷林を持つ家も少なくない。

3、食 事

(1) カマドと膳



石積みのカマド <中篠井>



高膳 <長岡>



箱膳 <上欠>

(2) 赤飯・餅・だんご (城山・荒針町)

注-③

①赤飯・コワメシ

祝事の際に作る。ササギを水煮して、その汁にモチ米をひたす。セイロに麻のフキンを敷き、モチ米とササギをまぜて入れ、釜の上ののせてふかす。赤飯はゴマシオをかけて食べる。他家に配るときは重箱に入れる。神様にあげる時は小皿にのせる。

②アズキ飯

毎月1日・15日に炊いた。アズキを水煮し、ウルチ米にまぜて釜で炊く。少し塩を入れて味をつける。この習慣は昭和のはじめ頃までなくなった。時に赤飯の代りにここれを用いることがある。

③餅

祝事を主として、不祝儀にもつくる。正月・3月の節句・4月のおしゃか様・5月の節句・7月土用の丑の日・神社の祭礼、不時には新築祝・葬式など。モチ米をセイロでふかし、臼でつく、普通は1人が杵でつき、1人がこねとる。大量につく時は3～4人が小さい杵でつく。正月用には、ノシモチ・オソナエモチ・カキモチなどを作る。カキモチは豆やノリやシソなどを入れて、子供らのよろこぶものを作る。

④だんご

主として仏事に作る。彼岸・葬儀・法事・お盆の時など。米の粉を湯でこね、せいろでふかしてだんごに丸める。ふかしたものを臼でつくとなめらかな上等のものができる。またこねたものを丸めてから湯で煮る場合もある。だんごはあんにくるんで食べ、焼いてショウユをつけたり、砂糖をつけたりして食べる。

⑤うどん・そば

うどんは不祝儀にもしばしば作る。また飯の代りにする場合もある。昔は自作の小麦を粉にして作ったが、近時は既成の乾うどんを買ってつかうことが多い。そばは自作ソバから作る。ウドンに比して使用量は少ない。

(3) 調査報告

①平常の主食

	朝 食	間食	昼 食	間食	夕 食	夜 食
呼 び 名	アサゴハン① アサハン②～⑤⑦⑩⑪ アサメシ⑥⑧⑨	コジハン ①～⑪	オヒル①③ ⑦⑨⑪ヒル メシ②③⑤ ⑥⑧	コジハン ①～⑪	ユウハン①②④ ⑤⑦⑩オイハン ③④⑧⑪ユウメ シ⑥	ヤシヨク① ⑥⑦⑩⑪
時 刻	6:00～6:30①④ 6:00② 夏6:00③⑤⑦⑧⑨ ⑩ 冬7:00 5:30～5:50⑥ 5:00⑪	9:30⑦ 10:00 ①～④⑤ ⑥⑧⑨⑩ ⑪	12:00 ①～④⑤⑦ ⑧～⑪ 12:30⑥	3:00 ①②⑤～ ⑪ 3:30④ 4:00⑦	6:30②④ 夏7:00③⑦⑩ 冬6:00 夏8:00⑤⑥ 冬5:00 7:00⑧⑨ 7:30①⑪	10:00 ①②⑩ 不定 ⑥⑦⑪
食 事 の 内 容	・ムギメシ 米：麦＝6：4① 米：麦＝7：3②④ 米：麦＝5：5⑥⑪ ・ヒキワリメシ 米：ワリムギ＝7：3 ⑦⑧ ・ワリメシ 米：麦＝5：5⑩ ・サンゴクメシ ヒエ・アワ・米・麦・ 芋③ヒエ・米・麦⑤⑨	ジャガイ モ、サツ マイモ、 エダマメ ①②④⑥ ⑧ フカ シイモ、 ハジキイ モ、ユデ サツマ⑤ 漬物⑩オ ニギリ⑪ トウナス ④	朝食におな じ	午前にお なじ	ムギメシ① メン類②④⑤⑦ ⑨⑪	クリ① ジャガイモ ②⑥ 芋(さつま) ⑩

②保存食

	塩漬け	みそ漬け	乾燥
種 類	キュウリ } ハクサイ } ①~③⑤⑨⑩ ナス } タクワン } ゴボウ ④ ニンジン ⑩	ダイコン } シソの実 } ①④⑤⑥⑧⑨⑩ ナス } キュウリ } ゴボウ ②⑥⑧ ニンジン ④⑥⑧ ショウガ ④	キンピョウ①⑥⑩ イモガラ①②⑤⑩ カンソウイモ①②④ キリボシ①⑤ カタモチ④ ホシ納豆⑤ カワフキ大根⑤ カキ⑧ キリズケ⑧

③餅をつく日

正	月	①~⑩	十	五	夜	⑤⑥⑩			
1	月	14	十	三	夜	⑤⑥⑩			
三	月	節	十	日	夜	⑦			
お	糺	迎	12	月	1	日	①⑤~⑩		
五	月	節	ス	ス	ハ	キ	③		
土	用	モ	チ	チ	ン	サ	マ	③⑤⑧⑩	
旧		盆	②⑤⑧⑨⑩	サ	ナ	ブ	リ	①③④⑤⑥⑩	
カ	マ	ブ	タ	餅	⑧⑩	初	誕	生	④⑤⑨

④飲食用具

用具	かま	おわん	ちゃわん
呼び名	カマ①②④~⑧ ツバガマ③	シルワン①④⑤⑥ オワン②③	チャワン②⑤~⑩ ゴハンチャワン④ チャツケチャワン③
用具	膳	晴れのときの膳	弁当入
呼び名	ハコゼン①②④⑧ トリゼン⑩ タカゼン①~③	ネコアシゼン①②④⑤ アシツマ③ タカゼン④⑥⑧⑩⑩ ホンゼン⑤ タカアシゼン⑦ ビッタラゼン⑩	ベントウバチ②④ ベントウバコ① アルバチ①③④⑩ 竹ゴウリ④⑦ 柳ゴウリ⑤⑥⑦ ヤツバチ⑥⑩ 竹の皮⑦ ヤロウバチ⑧ セトヒキベントウ⑩

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鶉内(平石) ③屋板(横川) ④東本代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(4) 解 説

最近の食事は栄養のことを考え大変デラックスになっており、毎食がごちそうの連続なようでさえもある。これにくらべると一昔前の食事は、ハレ（晴）の日とケ（平常）の日とでは内容がことなり、ケの食事は誠に粗食にあまんじたものだった。

朝食は、アサゴハン、アサハン、アサメシなどと呼ぶ。時間は夏と冬とでは異なり、夏はほとんどが6時頃で、冬は7時頃が多い。

食事の内容は、米と麦の混ざった麦飯が主体で、その他屋板、下川俣、中祿井各地区でサンゴクメシの例が見られる。

昼食はオヒル、ヒルメシと呼んでいる。朝炊いた残り飯を食べるのは今と変りない。

夕食はユウハン、オイハン、ユウメシなどと呼んでいる。時間は夏と冬とでは異なり、陽の長い夏は遅く、中には8時頃にとる所もある。

食事の内容は御飯類の他に、メン類がとられることが多い。

間食や夜食はいつもとは限らない。一般に田植えや稲刈り、麦刈りなど農繁期にとる。内容は田植えの時の赤飯やキンピラゴボウ、ニシンなどは例外として、ほとんどはイモ類だった。

かつては今のようには冷蔵庫がなく、また店もあちこちになかったからどこの家でも保存食を作ったものである。最も一般的なものは漬け物類で、中でもタクワンやハクサイツケ、あるいはダイコン、ナス、キュウリ、などのミソ漬けはどこの家でも大量に作りミソ部屋に保存したものである。その他の保存食では、乾燥品がある。カンピョウ、イモガラ、カンソウイモ、キリボシなどが一般的であるが、カンピョウは、いかにもカンピョウの産地らしい保存食である。

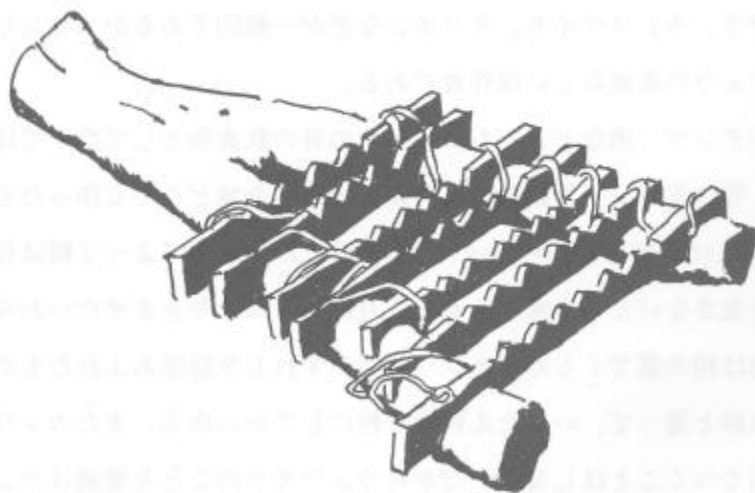
餅は赤飯やダンゴ、酒などとともに、ハレの日の飲食物としてなくてはならないものであった。特に正月、三月節句、五月節句は市内全域どこでも作ったものである。正月餅は実際には暮のうちに作るものであるが、ただし家例によって餅は作っても三日だけは餅を食さないという家がある。三月節句はヨモギをませたいわゆるクサ餅で、一方五月節句は柏の葉でくるんだカシワ餅でいずれも季節感あふれたものである。ともに普通の白餅と違って、いったん餅米を粉にしてから作る。またカシワモチは他の餅のように臼でつくことはしない。だからカシワモチのことを普通はカシワマンジュウとも呼んでいるのであろう。近年このような行事は新暦でやる家が多くなってきた。それゆえ季節に相応して作られるクサモチや、カシワモチは一般家庭では材料の入手

が困難となり、作ることがむずかしくなりました。

飲食用具について見ると、釜は鉄製のツバのついた釜を用いていた。ワンにはシルワンとメシワンとがあるが、かつては会津の漆器行商人から購入した木製の塗り椀であった。メシワンは今と同じ陶製のものが使われたが、紺絵付けのものが多かった。

今はどこの家庭でもテーブルや座卓で食事をとるようになってしまったが、かつては各々が膳で食事をしたものである。平常の食事に用いられたのは、ふた付きの箱型をしたハコゼンが多かった。ハレ（晴）の時の膳は、ネコアシゼンやタカアシゼンが多く使われたもので、特にネコアシゼンは漆塗りのもので金持ちでなければ所有できなかった。タカアシゼン、タカゼンと呼ばれるものは、脚が高いところからつけられた呼び名で、多くは木地がすけて見える春慶塗を施したものである。これらハレの日の膳椀類は、個人で所有する場合もあるが、地区で共同購入使用する例も多い。

弁当入れは、日光が曲物の産地であったことから日光曲物を用いた家が多い。マルバチとかヤッバチあるいはベントウバチなどと呼んでいる。曲物の弁当入れの他は、竹コウリや柳コウリのものもちいられた。



オニオロシ

4、衣 類

香川県 (1)

(1) 農作業者



野良着 <瓦谷>

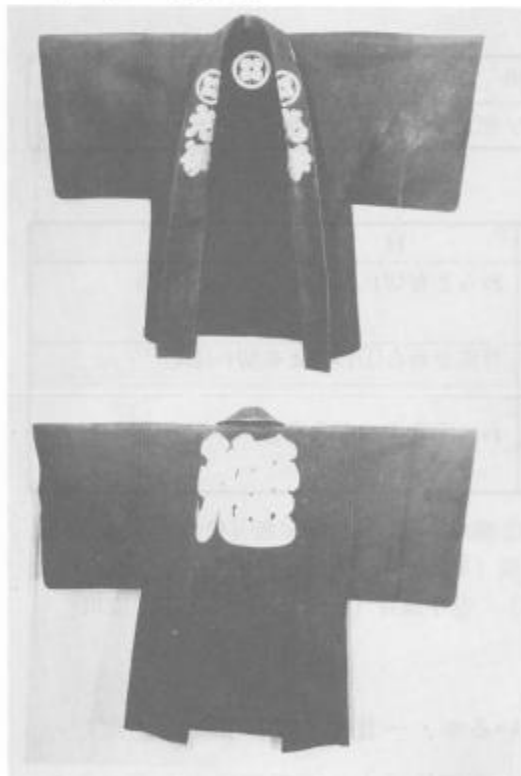


田植のいでたち<上篠井>



雨具 <西田中>

(2) 火事装束 注-④



(3) 石材採鉱用仕事着(大谷石) (城山・荒針町) 注-⑤

部位	性別	男(坑内用)	女(坑外用)
頭・顔		保護帽・防塵マスク	手拭・マスク
手		手袋	手袋
上 体		綿製ジャンパー、ランニング	綿製筒袖半着
下 体		綿製ズボン	前掛・モンペ又はズボン
足		長靴・ズック・地下タビは年輩者に多い	地下タビ
		男(昔)	※坑内の温度は季節による変化がないので作業服も1種で足りる。
頭・顔		手拭のほおかぶり	
手		なし	
上 体		印半天	
下 体		モモヒキ	
足		地下タビ	

(4) 調査報告

①仕事着

	上 体	下体	手	すね	かぶりもの
男	夏 シャツ①③④⑩ バン①④⑥⑧⑩⑪ ハン テン⑤⑦⑨ ソデナシ② ウデヌギ③ ヒトエモ⑩	モモヒキ ①～⑩	テサシ①④ ⑤⑧～⑩ テッコ③⑥	キャハン ⑥	アジログサ①④⑧ スゲガ サ②④⑤⑦⑩⑪ ムギワラボ ウシ③④⑥⑩⑪ テヌグイ ⑤⑦～⑩ ハチマキ⑧
	冬 シャツ①④ コシキリ ④ ワタイレバン テン① ～③⑧⑨ ハンテン⑤⑥ ⑧ ドウギ① ツツボ④ ラジュバン⑩	モモヒキ ①～⑥⑧ ⑨⑩	テブクロ① テサシ④⑨ テッコ⑥	キャハン ⑥	ムギワラボウシ④⑥ アジ ログサ⑧ テヌグイ⑨⑩
女	夏 ヒトエモノ① ジュバン ②～④⑥⑧⑩ ハンテン⑤⑦⑧	モモヒキ ①③～⑩ コシマキ ②④⑩ マ エカケ②	テサシ①④ ⑤⑧～⑩ テッコ③⑥ ⑦		テヌグイ①③④⑥～⑩ ハ チマキ⑧ スゲガサ①～⑦ ⑩⑪ アミガサ① アジログ サ②④⑧
	冬 ワタイレバン テン①～ ③⑤⑨ ノラギ⑩ ハダッ キ① ヒトエモノ① ハン テン⑥⑩	モモヒキ ①③⑤⑥ ⑧⑨⑩ マ エカケ①	テサシ①④ ⑨ テブクロ① テッコ⑥		テヌグイ①④⑥⑧⑨⑩ ス ゲガサ④⑥ アジログサ⑧ ハチマキ⑧

②雨 具

使 用 雨 具
ミノ①～③⑤⑧⑩⑪ スゲガサ①～⑧ ワラミノ⑦ ソデミノ⑨ ケラ⑨ カワゴザ⑨ ゴザミノ⑩

③ぞうり

名称	呼 び 名	材 料
ぞうり	ワラゾウリ①～④⑦ ゾウリ⑧⑨	わらと布切れ①～④⑨ 布切れ⑧⑩
筵	タケゾウリ①④	竹皮とわら① 竹皮と布切れ④⑩
ぞあし うしな か	アシナカゾウリ①②④⑤⑩ アシナカ⑥～⑨	わら①②④～⑥⑧⑨⑩

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鶴内(平石) ③屋板(横川) ④東木代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(5) 解 説

今は仕事着、普段着は洋装が一般的となっているが、一昔前までは和装が主流だった。農作業時の際の仕事着は、調査結果によると圧倒的に上・下二部式のものである。

男性の場合夏の上体は、ジュバンとする所が多く、次いでハンテン、シャツなどとなっている。冬の上体はワタイレバンテンとする所が多いが、これはハンテンやシャツの上に重ね着するもので、実際の仕事の際にはこれらをぬぎ、仕事の行き帰りに防寒の意味で着る場合が多い。下体は夏冬ともモモヒキである。

女性の場合夏の上体はジュバンが多く、次いでハンテン、ノラギなどとなっており、男性にみられたシャツは女性には見られない。冬は男性と同じくハンテンの上にワタイレバンテンを重ね着する場合が多い。下体は夏冬ともモモヒキである。なお、田植えの場合は、ナガギにモモヒキをはき、タスキをかけて帯をタイコにしめ、たくしあげたナガギの上にマエカケをかけ、モモヒキはヒザ下と足首のところを真新しいワラでしめたのが、一般的な姿だった。

手には男女ともテサシやテッコをする所がある。

すねにキャハンを巻く所は、西田中地区の男性のみであるが、この地区は山に接した所であるところから、おそらく山仕事の場合に使用したものと思われる。

かぶりものには、カサ類、テヌグイ、ボウシ類がある。カサ類では、スゲガサが多く使用されたもので、その他アジロガサやアミガサがある。テヌグイのかぶりかたにはアネサンカブリやホッカブリ、あるいはネジリハチマキやムコウハチマキなどハチマキにするかぶり方がある。アネサンカブリは、字のごとくもっぱら女性のかぶり方で、ホッカブリは冬季防寒のためのかぶり方である。ハチマキの場合は、威勢のよさが伴ない、男性がしめたものである。なお、テヌグイの場合は、それ自体だけでかぶる場合もあるが、笠をかぶる時にもつける。

ボウシ類についてみると、今回の調査結果ではもっぱらムギワラボウシで男性のみの使用となっている。

雨具について見ると頭にスゲガサをかぶり、ミノを着るのが一般的である。ミノではワラを編んだいわゆるワラミノが多いが、ゴザを用いたカワゴザやゴザミノと呼ばれるものも用いられている。このゴザミノは内側の背中に当たる部分がタタミオモテ、外側がワラでできたゴザで、これに腕をとおすヒモをつけたものである。

ゾウリ類では、いわゆる一般的にいうゾウリと小型で足の半程までしか入らないアシナカとがある。材料からみるとアシナカの場合はワラがつかわれるが、ゾウリの場合は、ワラ以外にも布切れを中に入れて編んだり、あるいは竹皮で編んだものも用いられた。

5、生 産

(1) 作業用具

注一⑥



トウミ <飯田>



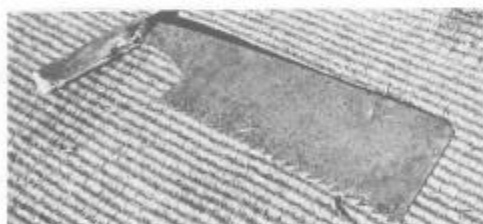
摺 臼



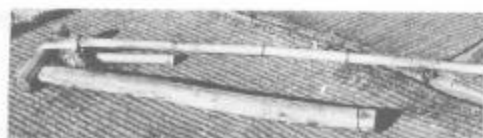
石切り用具 <長岡>



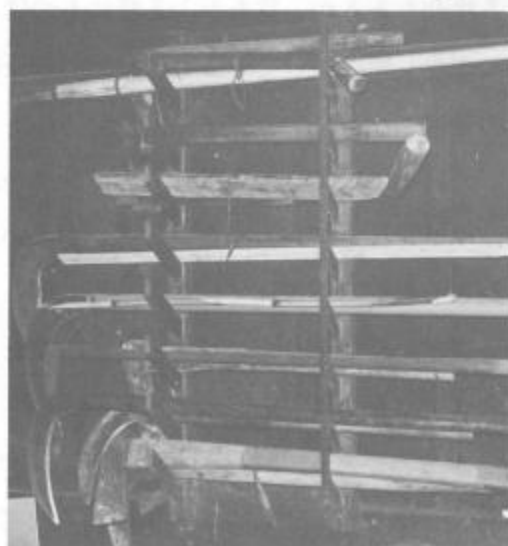
機械マンガン <上籠谷>



木挽鋸 <石那田>



クルリ棒 <石那田>



山仕事道具 <飯山>

(2) 生産暦 (篠井・篠井町) (参考頁・調査) 調査年度() 注-⑦

月	米	麦	他の作物	山仕事	その他
1		施肥(下肥) ↓		○木葉さらい(堆肥) ○木 ○木取り(燃料用) ○炭焼き ↓	○藁ざいく ○わらじ ○縄 ○みの ○むしろ
2		麦ふみ			
3	くろふみ	土入れ	ジャガイモ播種		
4	打起(田うない) 苗代 荒くれ ↓ 中代 ↓ 上代 ↓ 田植	打起(中耕)	ナス・サツマ・大豆 小豆・トウモロコシ サトイモ・ゴボウ ニンジン播種		
5	中代		サツマ移植 ↓	○植付(杉、ひのき) ↓	
6	上代	収穫			
7	除草(田の草) 1番(田の草) 2番(田の草)			○山の下列(堆肥用) ↓	
8	ヒエ取り		大根・カブ・ハクサイ 播種 小豆・ササゲ収穫 トウモロコシ } 収穫 インゲン } ↓		
9	ヒエ取り		大豆収穫 ↓		
10	刈取り	ビール麦 } 大麦 } 芽出し 小麦 } 播種	サツマ収穫 サトイモ収穫		
11	収穫 脱穀		菜類の収穫 ゴボウ } 収穫 ニンジン } 大根収穫	カヤ刈り	
12	整理 藁切り	麦ふみ		木葉さらい	

(3) 米の生産過程 (豊郷・瓦谷町)

注-⑧

仕事名	農機具	仕事の方法・内容等
○打 起	○スキ	・馬にスキをつけ田を耕す。
○苗 代	○ツツキ棒	・苗代田のゴミをツツキ棒でしずめた。 ・水かげんは、最初はうすく、徐々に深水にする。 ・八十八夜に「メボシ」になるようにする。メボシの時は水をかけない。
○代 カ キ	○マンガン ○土カキ棒	・水をかけた田を、馬につけたマンガンで耕し、その後、土カキ棒でならす。 ・代カキは、「荒カキ」「中シロ」「植シロ」「ナラシ」に分れる。
○田 植	○苗ヒキ板 ○フネ	・苗代をしめてより四十二日目を「苗日」と称して、天秤棒で苗を運び、苗ひき板、フネを使用して田植を行なう。
○除 草	○ガンズメ	・田植後二十五日から三十五日ごろ「一番草」をとる。一番草後、十五日から二十日ごろ「二番草」をとる。 ・除草は、手で行なったが、堅い田・水の少ない田の場合はガンズメも使用した。
○ヒエトリ		・稲の穂が出て、花が開いた後にヒエを取り除く。収穫までの間に2回行なう。
○稲 刈 り	○ノコギリガ マ	・刈り取った稲は、良いワラを取るため「イネ振り」をしなが らジボシする。 ・ほした稲は、「イネアゲ」といってノウにとる。ノウは普通 「マルノウ」・「カカエノウ」であったが、稲をマルック (ゆわえた)ものもあり、これを「マルキノウ」と呼んだ。
○稲 コ キ	○カナコキ	・稲ノウをくずしながら、カナコキにかけモミにしてから、俵 に入れて家へ運ぶ。 ・ワラは、たばねてほしてから、ノウをとる。
○調 整	○ボウジ棒 ○フルイ ○トウミ	・モミのノゲをとるためボウジ棒でたたく。 ・アイモミ、ノゲ、ゴミをトウミであおりとばす。 ・トウミで調整した後、フルイにかけツナがったモミを取り除 いた。これを「モミ振り」といいツナがっているモミは再び ボウジ棒でたたく。
○乾 燥		・「ムシロボシ」といってモミをムシロに広げて乾燥させる。 ・二日ほど乾燥させた後、俵に入れて、十二月まで貯蔵する。
○モミスリ	○スルス ○トウミ	・「スルスビキ」と称してスルスでモミを取り除き、その後ト ウミでアラヌカも取る。
○選 別	○千 石	・玄米を選別するため、千石にかけモミが残っていた場合はそ れを再びスルスにかける。 ・玄米だけになったら俵につめる。

(4) 調査報告

① 湿 田

湿田の呼び名		品 種 作 物	田の深さ
タンボ① ヤジツボ⑧	トブツタ② ヤダ④ ヤグツボ⑥	ナカテ①～④⑥⑧ ワセ⑩	膝まで①～③ ⑥⑧⑩

② 田 植

植手の性別	苗代しめにおける儀礼
定まっている①⑤⑥⑧ 女②④⑩ 女対男が7 対3の割合③	雷電神社からお札をもらう④ お羽黒さんからお 札を受ける⑧

③ 稲の干し方 (脱穀前の稲)

種類	呼 び 名	干 し 方
地 干 し	タナガリ① ジボシ②～⑤ ホシモノ⑩	刈ったものをうすく地面の上②～⑤⑧ わらの上に置く⑩
稲 架	ガボシ①⑩ オダガケ② サデガケ⑥⑧	立木に横木をわたす⑥⑩
稲 積	ノウ②③⑤⑥⑧⑩	抗もなにも使用しない②③⑤⑥⑧⑩

④ 田 の 神

呼 び 名	祭 り 方
タノカミ③⑧	田の端に石宮を造ったり、わらほうでんを作る③ 赤飯をあげる③ 神棚 に餅をあげる⑧

⑤ 田畑の農具

種類	呼 び 名
人力すき	スキ①②③⑨ タチグワ②⑧ エグワ②⑩ カラスキ⑥⑦
畜力すき	イシヤリ③⑩ バコウ③④ オウガン⑤⑥ ミヤスキ⑩
鍬	クワ③④⑩⑩ ビッチュウグワ⑤⑧ ビッチン⑩
掘 棒	ヤマイモホリボウ②④⑤⑥ ホリボウ③ ゴボウホリボウ③⑥ ゴキボウ⑩
鎌	ノコギリガマ②⑩ クサカリガマ②③⑥⑦ イネカリガマ③⑥ カマ③～⑤⑧⑨ カツラガマ④ ハガマ⑤ シタカリガマ⑦

⑥ 漁 撈

種類	呼 び 名	漁 獲 物	漁 期	漁 具
突 漁	ツキ⑤⑥⑧ ヒブリ② ④⑥⑩ ヤス①④	アイソ⑥ カジカ⑧ ナマズ⑩ フナ⑩ コイ⑤	6～8月⑥⑧ 5月⑩	ガラス箱④～⑥⑧ ヤス①④～⑥⑧⑩
網 漁	アラナガシ⑧ トアミ ④⑧	ザコ④⑧ アユ④ フナ④	4～5月⑧ 6～9月④	アミ④⑧ アミナ カ④
ウ ケ ナ ヤ ナ	ウケ②④～⑥⑧⑩ ヤ ナ④⑧ コズ③	ドジョウ②～⑥⑧⑩ ザコ②⑧ ウナギ④⑧⑩ フナ②④アユ④	6～9月 ① ②④～⑥	ウケ②④～⑥⑧⑩ コズ③ ヤナ④
釣 漁	ツリ①⑥⑧⑩ サゲバ リ⑤⑥ トモズリ④	アイソ⑤⑥ ナマズ①⑥ フナ ⑥⑩ ウナギ⑤⑥ アユ④	7～9月④～ ⑥ 5～8月⑩	釣り具④～⑥⑧⑩ サゲバリ⑤
特 別 な 漁 業	カワホシ⑤⑥ カイボ リ⑩ カガリクミ① カリボシ② ゴロダオ シ④ カジッカオシ④	フナ①⑥⑩ アイソ⑥ アユ④ ドジョウ①⑥⑩ ウナギ⑤⑥ ナマズ①⑤⑩	8～9月④⑥ 9月①⑩	松の根⑥ バケツ ・ザル・スコップ ①⑤⑥⑩ グミの 木④ あみ④

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鶴内(平石) ③屋板(横川) ④東木代
(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城
山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川)
⑪羽牛田(雀宮)

(6) 解 説

近年水田の改良が進んだ結果、栃木県内では湿田はほとんど姿を消してしまっていた。本市内の湿田は、台地上に深くきざまれた谷あいの所などにも多く分布していた。湿田をやぐとかやぐッポ、ヤジツタといったのはそのためである。ところで田の深さについてみると、そのほとんどは膝ぐらいまでの深さであったというから、それ程深い湿田ではなかったようである。

苗代しめから田植えにいたるまでの期間は、稲作業においては最も重要な時期で、この間には様々な儀礼が伴ない、また近隣間で種々の相互扶助が行なわれる。

苗代をしめた際、水口の所にお札をさす儀礼が各地で見られるが、市内東木代地区では電神社のお札を立てるといい、また大綱地区では上河内村の羽黒山神社から受けてきたお札を立てるといふ。なお、このお札を立てる棒には、多く小正月の時に作られたカユバシがかつては用いられたものである。

稲作と女性のかかわりは深いといわれているが、そのなごりは田植えに見られる。本市の場合、植手の性別が特に定まっていないという地区もあるが、大半は女性が主役だった。

稲の干し方について見ると、地干し、稲架、稲積などの方法がある。地干しは刈った稲をうすく田の面に並べて干す方法が多く、これをジボシとかカッボシ、タナガリ、ホシモノなどと呼んでいる。稲架の場合、西田中地区、羽牛田地区で立木に横木を渡した所に稲束をかけるという例が見られるが、多くは竹竿をザク又あるいは三差に立てたところに横木を渡し、その上に稲束をかけるもので、しかも本市などではほとんどが一段重ねである。呼び名はガボシ、サデガケなどといわれるが、オダガケの名は芳賀地方で多く呼ばれている呼び名である。稲積は稲の穂先きが中心になるように稲束を円筒状に積みあげたもので、これを本市ではノウといっている。

次ぎに田畑の農具について見る。

人力鋤と鍬との違いは、刃に対して柄が鈍角につき、向う側に土を起すのが鋤、反対に刃に対して柄が鋭角につき、手前に引っぱりながら土を起すのが鍬ともいわれる。人力鋤の場合、形はほぼ同形のものであるが、呼び名にはタチグワ、エグワ、カラスキなどがある。なお、この調査結果では単にスキという場合が4地区程あるが、鍬のことをスキと呼んでいる所もあるので、はたしてこれらが人力鋤をさしているかどうかは定かでない。

鎌の場合この調査結果では、クワとビッチェウグワの二種類のみであるが、本市の場合にはこの他マンノウ、トグワなども使われている。クワというのはいわゆるウナイグワをさし細うないにもっぱら使われているもので、別名野州グワともいわれる。ビッチェウグワ、マンノウ、トグワはそれぞれ図のような形をしたものであり、ビッチェウグワは田のへりをおこす際にもく使われ、マンノウは堆肥などをかきまぜる際に、トグワはおもに土木作業に使われる。

畜力犁は、イシヤリとかオウガンと呼ばれるものとバコウとの二種類がある。前者は原始的な犁で刃先きだけを村の鍛冶屋で作ってもらい、あとは自分で作る自家製のものが多い。後者は改良犁で、もっぱら鍛冶屋や農機具屋など専門家がもっぱら作ったもので、動力の耕運機が登場するまで長く使われた。

掘棒の場合は、その多くがヤマイモを掘る時に使われることからヤマイモホリボウと呼んでいる所が多い。

鎌は形態からつけられた呼び名、用途からつけられた呼び名、様々な呼び名で呼ばれている。ノコギリガマというのはノコギリ状の歯がついているところから呼ばれるものである。クサカリガマは雑草を刈るときに使うもので、イネカリガマは稲の刈りとりを使う。シタカリガマは山林の下草刈りの時に使うもので、他のカマに比し大型のもので、本市では坂本地区など山手の所で使われている。

漁撈については、本市の場合これを専業としていた人はほとんどなく、農作業のあいまに、いわゆる余暇として行っている。漁場は鬼怒川、田川、姿川など大小河川がおもな場所で、獲物となる魚はザコ、アイソ、フナ、ナマズ、ウナギ、ドジョウ、アユ、カジカなどである。

突漁はガラス箱で水中をのぞきながら、ヤスで魚を突くもので、夜間燈火をともしながら行なうものをヒブリといっている。

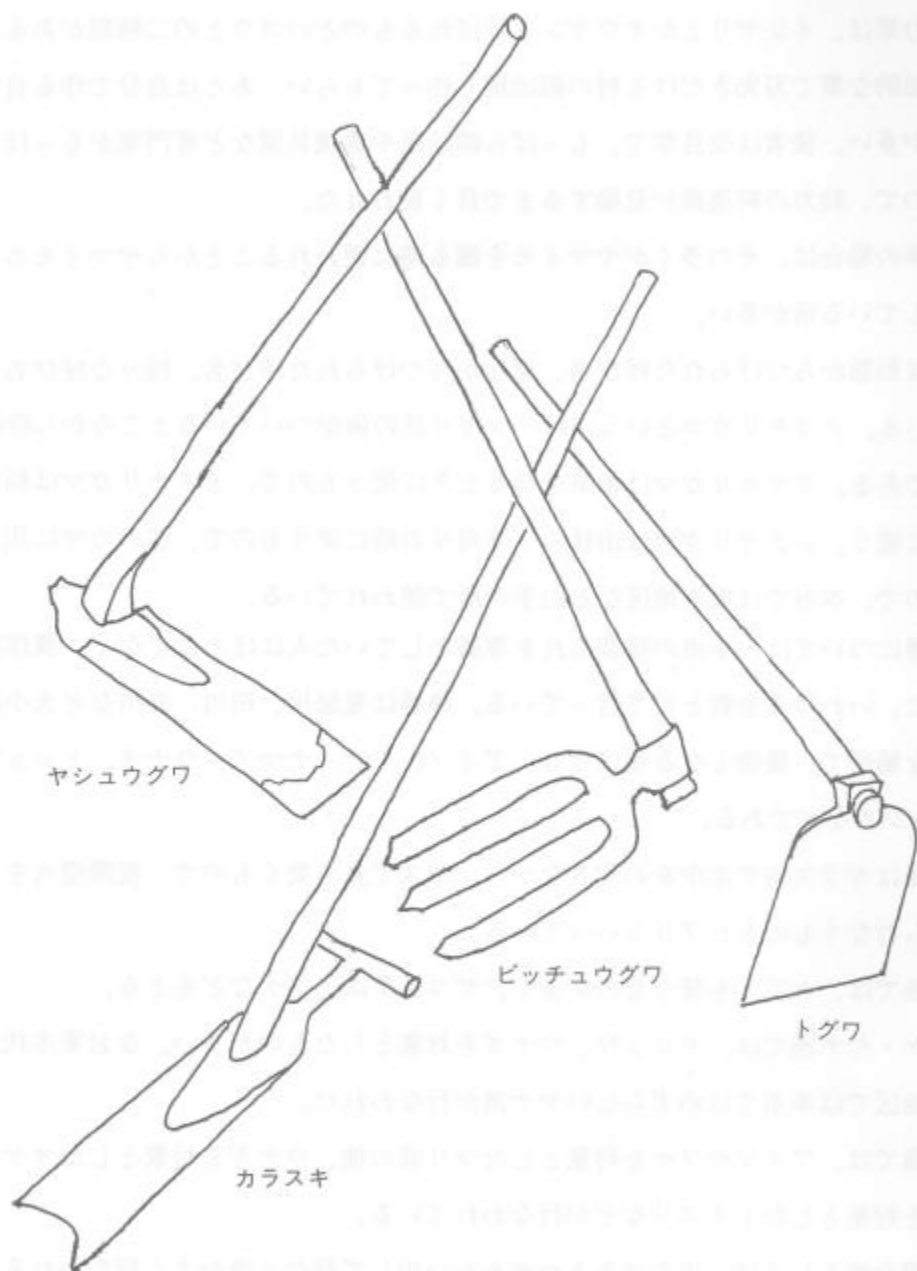
網漁では、トアミを使うものが多く、ザコ、アユ、フナなどをとる。

ウケ・ヤナ漁では、ドジョウ、ウナギを対象としたものが多い。なお東木代地区、大網地区では本市ではめずらしいヤナ漁が行なわれた。

釣漁では、アイソやフナを対象としたツリ漁の他、ウナギを対象としたサゲバリ、アユを対象としたトモズリなどが行なわれている。

特別な漁としては、川をせきとめ水をかい出して行なう漁がよく行なわれるが、本市ではこれをカワホシ、カイボリ、カリボシなどと呼んでいる。なお東木代地区に見

られるゴロタオシは、川の兩岸に人が木の葉をつけた縄を持って、川面をひきずりながら移動し、このことにおどろいてとびはねる魚を網で受けとるものである。



6、運搬・交易

(1) 運搬具



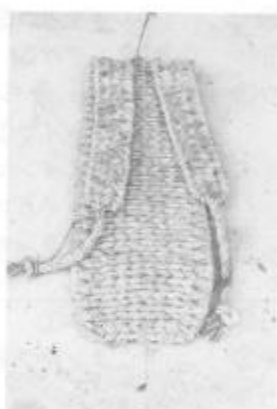
苗はこび用の舟　　<上籠谷>



しょいばしこ<荒針>



竹もっこ　　<上籠谷>



しょいこ　　<中篠井>

(2) 河川とトロッコによる運搬

注一⑨

①河川運搬（清原・道場宿町）

鬼怒川は大正の中ばまでは水運がさかんであった。道場宿には河岸があり、荷物の積みおろしが行われた。芳賀地方から産出される木炭は、ナラ、クヌギの上等のもので、東京に需用が多かったから、ここに問屋があって炭を買い入れ、それを舟で東京に出した。1隻の舟に4貫の俵を500俵積み、茨城県結城東の久保田河岸で中つぎするものもあり、東京まで直行するものもあった。帰りの舟には味噌、醤油、肥料など積んで来た。明治44年には、この河岸の持舟は85隻あった。今は1隻もない。

②トロッコ運搬（城山・荒針町）

昔は大谷石は石切場から集積所まで、石にロープをかけ、背にフトンを当てて背負い出した。婦人もこの労働に従事した。集積所からは馬車で運んだ。明治29年宇都宮軌道株式会社が設立され、トロッコにより、宇都宮、鶴田に輸送されるようになった。

昭和6年、東武鉄道株式会社となり、石材用鉄道によって、西川田に運送されるようになった。その経路は次のようである。

大谷—西川田—新栃木—栃木—北千住—東京
 鶴田（廃線になる）
 小山（東北本線）

(3) 調査報告

① 運搬具

種類	肩 担 い	背 負 い	畜 力
呼 び 名	テンピンボウ①～⑩ カツギボウ⑩ タケヤリ②⑤ ヤリツノボウ③ モッコ③	ショイナワ① イチッコ⑨ ヒグツ③ ショイバシゴ①～⑩ ショイコ①～⑩ セイタンマ④ ショイカゴ①～③⑦⑩⑩ タガラッカゴ	バシャ①⑤⑧ ウマ・ウシ③④⑩ ニグラ } コニゲ } ①～⑩ ビク }
種類	車	舟	そ り
呼 び 名	ニグルマ①～⑩ イチリンシャ⑥	フネ① テンマブネ④	ナエブネ⑤ イタブネ⑦ ナエシキイタ⑧ ドソリ⑧

② 交 易

	市	行 商
種 類 と そ の 呼 び 名	ハツイチ③④⑩ ハナイチ③④⑩ クレイチ①④⑩ エンニチイチ④ マエイチ① ウマイチ③④	ゴフク①③④⑩ クスリ①～⑩ カマ②④ ダガシヤ② ホウキ③⑤⑩ カイサンブツ④⑤⑦⑧ コウジ⑥ アブラヤ⑩⑩ セトヤ⑩ フルイ⑩

※調査地区 ①野高谷（清原） ②鶴内（平石） ③屋板（横川） ④東木代（瑞穂野） ⑤下川俣（豊郷） ⑥西田中（国本） ⑦坂本（城山） ⑧大網（富屋） ⑨中篠井（篠井） ⑩下欠下（姿川）
 ⑪羽牛田（雀宮）

(4) 解 説

運搬具では、肩担い運搬、背負い運搬、畜力による運搬、車による運搬、舟利用の運搬、ソリによる運搬について調べた。

肩担い運搬では、テンピンボウが最も多く使われ、その他、カツギボウ、タケヤリ、ヤリツノボウ、モッコなどがある。一般家庭におけるテンピンボウでの運搬は、そのほとんどが肥やし運搬に使われたもので、杉の木の丸太などに、滑りどめの釘を打ちつけた雑なものである。栃木県下でカツギボウといった場合、多くは水桶を運搬する両端にカギのついたものである。下欠下地区でのカツギボウもおそらくは、これと同じものと思われる。タケヤリ、ヤリツノボウは、竹竿の端を鋭利に削ったもので、麦や稲束につきさして、運搬する時に使われる。

背負い運搬では、ショイバシゴ、ショイカゴが最も一般的である。ショイバシゴは、たてのまま休むことが出来、便利なものである。山間地では、降り道足がひっかかってしまうところから平野地帯のものよりも短かめなものが使われている。なお、県北地方のショイバシゴの脚は外側に湾曲しているものが多いが、本市でみられるものは、まっすくなものが多い。

ひと口にショイカゴといっても様々なものがある。本市などで見られるものには、木の葉カゴ、草刈りカゴ、ザルカゴなどのものがある。木の葉カゴは最も大型のもので、落ち葉を運搬する時に使用される。草刈りカゴは木の葉カゴよりやや小型のもので、かつてはよく馬に与える草を刈っては運搬する時に使用したものである。ザルカゴは小型のもので、六ッ目に編んだカゴの内側にザル状のカゴがついた二重カゴで、底にはワラでつくった輪がついている。日常生活品や野菜などの運搬に使われる。

畜力による運搬では牛よりも馬が多くつかわれた。小荷田と称して馬の背に荷を振りわけにして運搬する方法もあるが、本市では比較的早くから馬車が使われたようである。

車による運搬は、人力を対称としたもので、荷車がもっぱら使われた。

鬼怒川や田川など本市には大きな川が流れているが、流れが早いのか、舟の利用はあまりみられなかったようである。

ソリというと雪の上を滑べるものと思いがちであるが、地上を滑べるソリもある。ドソリというのは、半分に割った丸太を敷きならべた上を滑べらせるもので、山間地で材木を運搬する時に使われる。本市では山手の大網地区に見られる。ナエブネ、イ

タブネなどフネと呼ばれているが、これらはナエシキイタと同じく田植えの時に苗をのせて泥田の上を滑らせるもので、いわゆるソリの一種である。

市については、本市の上河原で1月11日に、二荒山神社前で旧1月11日にそれぞれ初市が行なわれている。その他近くでは鹿沼、石橋、氏家、今市などでも年末、年始に市が開かれている。屋板地区、東木代地区で馬市の参加が見られるが、おそらくは近くの石橋の馬市に行ったものと思われる。

行商では、越後の毒消し売り、越中富山の薬屋がよく知られているが、その他茨城や千葉方面からの海産物、鹿沼のホウキ売り、その他鎌売り、油売り、駄菓子屋、コウジ屋、瀬戸屋、フルイ売りなどがある。



門前市（二荒山神社前）

7、社会生活

(1) 共同作業



共同山の刈り払い 〈中篠井〉



いえどりによる稲刈 〈瓦谷〉

(2) 村落(豊郷地区)の組織

注一⑩

●戸数

明治末期から大正初期の各部落の戸数は、少くない方で横山の16戸、山本17戸、堀米18戸等であり、多いのは、岩曾の60戸、川俣の45戸などである。

●区長

部落の長は「区長」と呼ばれ、部落民の推せんによって選ばれた。区長の任期はどの部落もだいたい2年であったが、再任をさまたげないため、区長12年間という人や終身区長を務めた人などもいた。

引継物件は、部落の地図、会計簿、部落関係の文書等であり、「こうり」や「ながもち」に納められていた。また、区長の家は、多くの部落で集会所となっていた。

●組

小組は、だいたい5～10軒くらいで構成され、組数は2～8組であった。組の名称は方位や小字名によってつけられた。

2、3例あげてみると次のとおりである。長岡〔上・中・下組〕、山本〔東・中・西組〕、横山〔西・東組〕、岩曾〔川向・中下・中根組〕。

●財源・村仕事

部落の財源は、共有財産である共有地の収入によって多くはまかなった。共有地が山(共同山)の場合は、立木を売却した代金を、田の場合は小作を入れて、小作料をあてた。また神社の土地(斎田祭面)を所有した部落もあった。共有地の収入以外に「字費」として、各戸から徴収する場合もあった。

共同作業は、道路・水路普請の他せきの手入等であり、各戸より人が出て行なった。

●ふれ番

部落の作業、行事などを区長の指示により各戸に知らせる役を「ふれ番」といった。ふれ番は、各戸交替制で行なったが、いくらかの手当でふれ番役専門の人を置いた部落もありだいたいおばあさんがあつた。

①年齢集団

	呼 び 名	加入年齢	脱 退	役 員	任 務	宿
子供組		6才① 7～12才②	12～13才① 12才②		どんどん焼き①④神社 清掃①	学校①
若者組	ワカシウグミ①④⑨ ワカイシユ② セイネンダ③⑩ ワカイシユグミ⑤⑧ セイネンカイ⑥⑪ ワカイシグミ⑨	13～14才① 15～16才② ④学校終了後③⑩⑪ 16才～30才位 ⑤高小卒業 ⑥16～25才 ⑧	35才位②結 婚③④⑤30 才⑥世帯主 となったと き⑧妻帯者 ⑩特になし ⑩	団長、副団 長 会長①全 員加入③ 会長⑤ 若いしゅが し ら⑧会長、 副 会長、支 部長 ⑩	日待ち芝居運動会の主催①有名無実③運動会⑥3月10日の祭り④他地区との交歓⑧天王祭の屋台の組立て⑨運動会、祭、米や麦の試作研究⑩神社の植林、運動会、祭、農業の視察⑪	三島神社①横 川青年団下 屋 板支部・学 校 支部長宅③ 会 長の自宅⑤ 廻 り番⑧高 照院 ⑩（公民館） 個人や役員 の家⑪神社④
娘組	シヨジョカイ② ④⑥⑪	高小卒業⑥ 学校卒業⑪	結婚④⑥⑪	会長⑩	運動会⑥祭りの芝居⑩ 病院いもん⑩	会長宅⑥役員 の家⑪

②山岳信仰関係の講集団

名 称	参加者の性別	講 の 内 容 ・ 行 事
男体山講① ～③⑦～⑩	男・女①男 女人禁制③ 男⑤⑧⑩	清原の人が募集して希望者のみ参加① 白衣をつけ体を浄めるため行屋にこもり、代参を立てた① 白装束（戸主）② 8月1日に登拝③ 10人講のうち3人と決めて何人かが代参③ 50～60人、まわり番、代参参拝（8月1日）参拝し、お札を配る⑦ 白衣で精進料理を食べ、一週間くらい行屋で水行をやった⑧ 一週間位、みだらな行動をしない⑩ 白衣を着用して登山した⑩
加波山講② ④⑨⑪	半分②男子 が多い⑩	世話人② みこしが来て部落を回る⑩ 神主が来て拝む⑩ 一戸一戸ほとんど回る（大正末春の頃）⑩ 嵐よけ④
御獄山講①	男・女①	男体山講と同様①
三峰③⑧		廻り順、二名が組になり、三峰に行って札をもらってくる③⑧ 当番制で札を受けに行く⑥ 三峰山登拝、一年交代で代参⑧

③相 続

呼 び 名	相続人	事 由 ・ 方 法
シンジョウワタシ①アトツギ② イサンソウゾク③アトトリ④⑩ ⑪シンジョウエズリ⑤⑥シンシ ョウモチ⑧	長男①～⑥ ⑧⑨⑪	70才位になるとせがれに相続① 親が動けなくなったとき④⑧⑩ 世帯主の死亡のとき⑤⑥⑩⑪

④隠 居

呼 び 名	事 由 ・ 方 法	同 居	持 っ て 出 る も の
インキョ①②④～⑦ ⑨～⑪ ワカインキョ③	50代位で隠居。仕事は共にする。炊事は別① 年寄隠居② 断絶に近い状態のとき③④⑩ 裕福な家⑤ 60才頃⑥ 老後を楽に⑥⑧	別居①～③ ⑤⑥⑧⑩⑪ 同居④	夜具、炊事道具、く ど、かぎじるし①財 産の一部⑤日用品⑥ ⑧⑩

⑤分 家

呼 び 名	分家する人	事 由 ・ 方 法	も ら う も の
シntax①②⑤⑦⑧ ⑩ ブンケ①③④～⑥⑩	次・三男①～⑧⑩ ⑪ 女子（嫁に行けな い女）①②	親が子に土地を分ける①③ 本家につくした者④⑩ 祭りに酒を出しあいさつ① 裕福な家⑤⑧⑩	田、①③④⑩⑪家、かま ど、農具①③ 財産の一部⑤⑥⑧

⑥親族集団

呼 び 名	内 容（範囲・つきあい方）
シンルイ①～③⑤⑦⑩ シンセキ①④⑧⑩⑪ マケ⑤⑥⑨ イチマキ⑩ ミウチ⑩ エンビキ⑩	御祝儀、葬式、お産、年忌の墓参①③④⑩ 兄弟、おじ、おばの三親等位 まで①④⑥ いとこの四親等位まで② 分家等近くにいる血すじの者③⑤⑦ 親族は永久時に⑩⑪

⑦擬制約親子

呼 び 名	オヤに頼む人	コとなる人	契 約	事 由	つき合い
ステゴ②③⑩⑪ ヤクゴ⑤ ヒロイオヤ⑥⑧	近所の人①⑩⑪ 知人③⑩ 隣りのおばさん⑤ 通った人⑧⑩	33才の厄年に生 まれた子①⑩ 年回りが悪い時 に生まれた子③ ⑤⑩	道の十文字。 事前に話しを つけておく③ その時だけ⑤	厄おとし①⑤ 親がよわいと き②面倒をみ てもらう③ 双子の時⑧	正月に年始に行 く① 盆暮②

※調査地区 ①野高谷（清原） ②鶴内（平石） ③屋板（横川） ④東木代（瑞穂野） ⑤下川俣（豊郷） ⑥西田中（国本） ⑦坂本（城山） ⑧大網（富屋） ⑨中篠井（篠井） ⑩下欠下（姿川） ⑪羽牛田（雀宮）

(4) 解 説

本市におけるかつての年齢集団についてみると、他地域と同様若者組の活動が最も活発であった。大正期に入ると、それ以前の若者組組織にかわって青年団組織が活発になり、若者組組織から青年団組織への過渡的時期となる。このような時代の変化は本市でも顕著に見られ、呼び名はワカイシュウ（ワカイシュ、ワカイシ）グミ、ワカイシュウなど旧来の名称が使われているにもかかわらず、参加する若者の年齢においては、そのほとんどが高小卒頃から結婚時頃で、青年団組織に見られる年齢となっている。今回の調査では、ただ1ヵ所、鶉内地区のみワカシユの呼び名で、脱退時が40才位とする所がある。任務は芝居や運動会、土地の神社の祭りなど村人の娯楽に関する奉仕活動が主となっている。

娘組の活動は若者組にくらべるとそれほど活発なものではなかったようである。男の青年団組織に対して処女会が結成され、青年団とともに村の娯楽の奉仕活動にあたりたりしている。

青年層の集団が常時営まれていたのに対し、子供組の場合は臨時的に結成される。おもに正月14日のどんどん焼きの時に、参加は小学生で、1番年長者が自然リーダーシップをとり組を統制するのがならわしである。

山岳信仰関係の講集団についてみると、本市では、男体山講、加波山講、御獄山講、三峰講などが見られる。男体山講は、下野の霊峰男体山を信仰する講で、かつては大網地区のように白衣で精進料理を食べ、一週間くらい行屋で水行をやるなど、代参人は厳しい行を経たのち登拝したものである。なお、今回の調査結果には記されていないが、男体山登拝に着用した行衣を死装束とする所がある。

加波山講は、茨城県の加波山を信仰する講で、芳賀郡下ではかつてはかなり盛んに行なわれた。本市では芳賀郡に近い一部の地区に見られるが、芳賀郡より遠く離れた中篠井地区にも見られる。加波山講の特色は、神輿が村廻りすることで、この信仰圏の人々は、神輿がくるのを首を長くしてまったという。

相続について見ると、本市では相続のことをシンショウワタシ、シンショウユズリ、あるいはアトツギ、アトトリとかと呼んでいる。相続人は長男とする所がほとんどであるが、明治初期頃までは、長子相続をとった地域も多い。ところでひと口に相続というが、相続するものには土地や家、その他諸々の財産の他、一家の長としての権限、地位もある。一般に村づきあいや、家計のやりくりなど、権限、地位の移譲が早く、

財産は死にゆずりの形をとる。

隠居、分家は本市の場合ほとんどの地区で見られる。本市にみられる隠居は、老夫婦が若夫婦と同居のわずらわしさから離れ、別居して余世を楽しむという、いわゆる楽隠居である。屋板地区でワカインキョと称し、若夫婦と断絶に近い状態の時隠居をするというのは、例外的な存在であろう。この楽隠居は、若夫婦に財産の管理から村づきあいなどを譲った後隠居するもので、隠居する際には老後の生活に最低限必要なものだけを持って出るだけが多い。なお、老夫婦が持って出る田畑をインキョメンと称する所がある。

分家慣行が見られる所は、一般に財産を分割することのできる裕福な地域である。本市の場合、分家のことをブンケあるいはシンタクと称し、そのほとんどが次・三男の分家である。分家する時期は、結婚時で家を新築してもらい、食うに足りる分の田畑、その他財産の一部をもらうとする例が多い。なお、今回の調査結果には記されていないが、特に裕福な家では、よくつくした奉公人を分家に出す奉公人分家の例が見られる。また、上が女ばかりで、後になって男の子が生まれたという家の場合、ひとまず長女に婿養子をもって家をつがせ、やがて男の子が大きくなると、この男の子に家をつがせて姉夫婦を分家に出すという特殊な例もある。

親族集団の場合、呼び名の多くはシンルイ、シンセキでその他ミウチ、エンビキなどと称する所がある。親族の範囲、つきあい方は、血筋のこさに左右され、また村内の者どうしと村外に離れてしまった場合とでも異なる。多くは三親等からいとこの四親等位までを親族の範囲とするが、屋板地区、下川俣地区、坂本地区などでは、近隣の場合は、血筋を引く者はみな親族とする所もある。親族間のつきあいは、血筋がこい程そのきずなは強く、近い親族内では冠婚葬祭におけるつきあいはもとより、農作業を始めとする日常生活上の相互扶助までおよぶ。反対に遠い親族間では葬式づきあいだけとする家も多く、このような血筋のうすい親族を本市ではジャーボシンセキと呼んでいる所もある。

8、信 仰

(1) 野仏と社寺



十九夜様 <関堀>



道祖神 <大網>



庚申塔 <石那田>



鎮守様 <下桑島>



延命院 <泉町>

(2) お釜様と田の神様



お釜様 <中篠井>



田の神様 <上欠>

(3) 宇都宮の主な野仏

注-⑪

番号	名 称	年代	番号	名 称	年代	番号	名 称	年代
	(清原地区)		34	十九夜尊像			(瑞穂野地区)	
1	観音像		35	阿弥陀如来碑	安政4年	66	薬師如来像2体	
2	地藏尊像		36	十九夜尊像	弘化4年	67	観音像	
3	観音像		37	"		68	庚申塔	
4	六地藏		38	二十六夜供養塔		69	地藏尊像	元禄15年
5	十九夜供養塔2基	正徳3年 元禄11年	39	二十三夜供養塔	文化3年	70	十九夜供養塔	正徳5年
6	馬頭観音像2体	文久元年	40	馬頭観音像		71	"	正徳4年
		文久3年	41	六地藏		72	観音像	
7	石 碑	文政6年	42	道路修覆供養塔	文政3年	73	十九夜供養塔	
8	宝篋印塔	延享2年	43	庚申塔	明治3年	74	"	文久元年
9	地藏尊4体		44	とうろう2基	再 立		(豊郷地区)	
10	十九夜供養塔2体	文政11年 文久元年	45	庚申塔		75	馬頭観音像	
				(横川地区)		76	五輪塔3基	
11	六地藏			十九夜尊像3体	享保11年	77	観音像	文政7年
12	二十三夜供養塔	寛政4年	46	地藏尊像	寛政7年	78	十九夜供養塔3体	
13	六地藏	安永3年		十九夜尊像	享保2年	79	阿弥陀如来像	
14	二十三夜供養塔	明治4年	47	六地藏		80	十九夜供養塔2体	嘉永3年
15	地藏尊像	貞享3年	48	勝善神		81	地藏尊像	
16	遺 標	寛政2年	49	六地藏		82	十九夜供養塔	
17	宝篋印塔	宝暦14年	50	"	(建武2年)	83	地藏尊像5体	
18	六十六部供養塔	享保18年	51	墓 石		84	十九夜供養塔	弘化3年
19	庚申塔	天文5年	52	地藏尊像	享保12年	85	"	天明6年
20	大日如来	承応4年	53	十九夜尊像		86	地藏尊像3体	
21	地藏菩薩	享保5年	54	十九夜尊像2体		87	宝篋印塔	明和2年
22	おびんづる様		55	六地藏		88	地藏尊像	寛政9年
23	雷 電 神	天保2年	56	地藏尊像		89	破損仏体4体	
24	しょうづか婆さん		57	十九夜尊像	正徳4年	90	馬頭観音像	安永3年
	(平石地区)			とうろう	天明3年	91	"	弘化4年
25	五十里石		58	十九夜尊像		92	地藏尊像2体	寛文13年
26	とうろう2基		59	男体山		93	阿弥陀如来像	
27	十九夜供養塔		60	地藏尊像		94	馬頭観音像	文政13年
28	宝篋印塔2基			二十三夜供養塔		95	十九夜尊	安政7年
29	地藏尊像		61	十九夜尊像	安政6年		(国本地区)	
30	こま大群3対		62	庚申塔		96	磨崖仏3体	
31	観音像		63	地藏尊像		97	観音像3体	
32	"	寛保元年	64	大日如来像		98	地藏尊像2体	
33	地藏尊像	天保3年 明暦2年	65	十九夜尊像	享保2年	99	観音像	天保12年
						100	地藏尊像	

番号	名 称	年代	番号	名 称	年代	番号	名 称	年代
101	六 地 蔵 (城山地区)		125	男 体 山 白 雲 山	安永 8 年	149	馬 頭 観 音	
102	観 音 像		126	地 蔵 尊 像		150	石 灯 籠	安永 8 年
103	供 養 塔	天保 8 年	127	宝 篋 印 塔	明和 9 年	151	う ら な い 仏	享保 15 年
104	観 音 像	享保 12 年	128	馬 頭 観 音	弘化 4 年	152	大 黒 天	
105	地 蔵 尊 像		129	道 標	享和 2 年		(委川地区)	
106	"		130	"	文化元年	153	地 蔵 尊 像	明和 3 年
107	観 音 像		131	"		154	供 養 塔	宝暦 12 年
108	六 地 蔵		132	六 地 蔵	享保 16 年	155	観 音 像	天明元年
109	男 体 山	文化 10 年	133	白 雲 山	天明 4 年	156	地 蔵 尊 像	
110	馬 頭 観 音 像	寛政 8 年	134	碑 石		157	"	
111	地 蔵 尊 像	享保 2 年		(篠井地区)		158	こ ま 犬	
112	観 音 像 7 体	文政 6 年	135	馬 頭 観 音 像	天保 11 年	159	と う ろ う	
113	男 体 山		136	供 養 塔	享保 7 年	160	男 体 山	天保 3 年 文政 12 年 大保 8 年 天保 12 年
114	十九夜供養塔2体		137	"	正徳 3 年	161	道 標	
115	石 仏 群		138	大 黒 天		162	観 音 像 2 体	
116	巳 待 塔	弘化 2 年	139	と う ろ う	元禄 16 年	163	地 蔵 尊 像	
117	勝 善 神		140	不 動 尊 像			庚 申 塔	
118	男 体 山	文化 10 年	141	こ ま 犬		164	大 日 如 来	文政 5 年
119	道 祖 神	嘉永 5 年	142	阿 弥 陀 尊 像	享保 15 年	165	十 九 夜 尊	享保 5 年
120	石 祠	文久 3 年	143	地 蔵 尊 像 3 体	昭和 2 年		(雀宮地区)	
121	麿 崖 仏 (富屋地区)			観 音 像 4 体	明和 6 年	166	観 音 像 4 体	元禄 10 年
122	道 標		144	石 碑		167	地 蔵 尊 像	天保 8 年
123	地 蔵 尊 像		145	道 標		168	"	延宝 7.9 年
124	"		146	庚 申 塔	正徳 2 年	169	"	享保 2 年
			147	"	明和 9 年	170	"	正徳 5 年
			148	"			観 音 像 33 体	安政 6 年

※上表の掲載基準

- ・比較的製作年代の古いもの。
- ・珍奇で他に類例の乏しいもの。
- ・特に昔から信仰を集めているもの。
- ・社寺の境内にあるものは除いた。
- ・出来ばえの美事なもの。
- ・由緒来歴を秘めるもの。
- ・旧市街地にあるものは除いた。

(4) 宇都宮地区別神社一覽

第一編 宇都宮地区別神社一覽 注一⑫

社名	旧市内	清原	平石	横川	瑞穂野	豊郷	国本	城山	高屋	篠井	姿川	雀宮	社名	旧市内	清原	平石	横川	瑞穂野	豊郷	国本	城山	高屋	篠井	姿川	雀宮
秋葉神社									1				天満宮					1							
阿蘇神社										1			栃木県護国神社	1											
愛宕神社		1							2				鷺子神社		1										
生駒神社							1		2				東谷神社												1
巖島神社							1						戸室神社								1				
稲荷神社	1	2	2	1				1			1		砥上神社										1		
今宮神社		1					1						長良神社						2						
岩原神社							1						中島神社												1
宇賀神社					1								鶏鳥神社									1			
鶯嶋草神社	1												新渡神社										1		
大塚神社				1									八幡宮	3											
大山祇神社				1									八幡神社												1
大石山神社								1					白山神社						1						
蒲生神社	1												八龍神社	1											
熊野神社								1			1		羽黒神社											1	
鷄峰神社			1										日吉神社					1	1						
琴平神社	2	1						2	1				平出神社		1										
御霊神社						1							平松神社				1								
鷺宮神社											1		平野神社						1						
猿山神社				1									日枝神社						1	1					
塩釜稲荷神社	1												富士山神社	1						1	1				
下栗神社				1									星宮神社	1	4	2	2		1		2	1		5	
十二社神社					1								矛神社								1				
神明宮	1						2						宝国神社				1		1						
菅原神社	2			1							1		保古神社								1				
雀宮神社												1	御田神社												1
諏訪神社			1										三島神社	1											
浅間神社						1							八坂神社	1	1						4		1		
高籠神社	4	1		1	7	7	1	3	1	4	1	4	湯殿神社				1				3	1			
高尾神社	1			1	1							1	雷神神社	1											
館神社		1											雷電神社										1		
龍尾神社				1									両宮神社		1										
立岩神社								1					六所神社										1		
多藤神社									1				若松神社												1
智賀都神社	1							1	1				計	19	17	8	13	10	14	13	24	13	7	10	12

(5) 宇都宮地区別寺院一覧

第一分科 宇都宮地区 注-13

番号	寺院名	宗派	番号	寺院名	宗派	番号	寺院名	宗派
	(旧市内地区)		31	日蓮宗宝木妙義 教会	日蓮宗	55	万松寺 (国本地区)	曹洞宗
1	光徳寺	天台宗						
2	善願寺	"	32	宝勝寺	時宗	56	自性院	真言宗
3	宝蔵寺	"	33	一向寺	"	57	長林寺 (城山地区)	曹洞宗
4	高野山宇都宮 大教師会	真言宗	34	本願寺	"			
5	花蔵院	"	35	応願寺	"	58	大谷寺	天台宗
6	延命院	"	36	妙霊寺	中山妙宗	59	持宝院	真言宗
7	能延寺	"	37	常照寺	本門仏立宗	60	能満寺 (富屋地区)	"
8	生福寺	"	38	速観寺	"	61	伝法寺	曹洞宗
9	浄鏡寺	浄土宗	39	仏所護念会教団 宇都宮地方教会	仏所護念会 教団	62	光明寺 (篠井地区)	単立
10	清巖寺	"	40	日本山妙法寺 宇都宮中僧伽	日本山妙 法寺大僧伽	63	東海寺 (委川地区)	真言宗
11	慈光寺	"	41	光明寺 (清原地区)	単立	64	東福寺	天台宗
12	常念寺	"	42	宝泉寺	天台宗	65	光音寺	"
13	光琳寺	"	43	薬王寺	"	66	宝林寺	"
14	大運寺	"	44	宝蓮院	真言宗	67	高照院	真言宗
15	報恩寺	臨濟宗	45	大乘寺	"	68	福智院	"
16	興禪寺	"	46	同慶寺 (平石地区)	臨濟宗	69	亀泉院 (雀宮地区)	"
17	成高寺	曹洞宗						
18	桂林寺	"	47	医王寺	真言宗	70	西光寺	天台宗
19	林松寺	"	48	広琳寺	"	71	正光寺	"
20	祥雲寺	"	49	仏心寺 (横川地区)	単立	72	永盛寺	曹洞宗
21	台陽寺	"						
22	天勢寺	"	50	千手院	真言宗			
23	真福寺	黄檗宗	51	恵光寺 (瑞穂野地区)	単立			
24	観専寺	浄土真宗						
25	安養寺	"	52	成願寺	真言宗			
26	正行寺	"	53	金剛定寺 (豊郷地区)	"			
27	妙正寺	日蓮宗						
28	妙金寺	"	54	光性寺	曹洞宗			
29	法華寺	"						
30	東妙寺	"						

(6) 調査報告

①山の神

御神体	性別	性格	行事内容
○塚の上の石碑①	不明	○山の作業の安全を守る	年1回、旧12月6日に日待ちをした。この日の午後、木こりの元締めの家に集まり飲み食いをする。元締めの家で作った食べ物、元締の使う道具に神酒を供えた。
○掛軸⑥ ○無し	不明 女	○サンジンサマ ○不明	・当番の家に掛軸をさげ、酒盛りをやる。 ・旧1月6日に山入りし、けがをしないようにヤマノカミを祭る。

②家の神

	神の性格	祭り方	像の有無	言い伝え
オカマ様	○火の神(ヒブセ)① ~③⑤⑥⑧⑨ ○作物の豊作を願う⑩ ○カッテをまつる⑪	・カマドの上に棚をつくり幣束、ゾウニ、酒を供える。①~③⑤⑥⑧⑨~⑩ ・ウジガミに幣束、赤飯を供え、シメナフを交換する④	無 ①~⑪	・ホホドの神(火)を大切に する⑧
便所神		・お七夜の時に便所に参る①②④ ・幣束を供える⑥ ・正月の16日夜にあずき飯を供える④		・つばをはくと口がさける。

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鶴内(平石) ③屋板(横川) ④東木代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(6) 解 説

香海支那(8)

山を生業の舞台とする土地では山の神信仰が盛んである。本市の場合山の神信仰が見られるのは、北西部山沿いの大網地区、西田中地区、それに東部の平地林の広がる野高谷地区などである。山仕事に従事する人が山での安全を祈るために祀るもので、行事の内容は宿に山の神を祀り、山仕事従事者が集まり飯食するといったものである。なお、山の神様の場合よく性別が問題にされるが、本市の場合その両方が見られる。

八百万の神といわれるように、日本にはいたる所に神様がいますが、中には家のある特定な場所を司どる特殊な神様がいます。本市の場合、家の神として最も一般的に祀られているのは、オカマ様と便所神である。オカマ様は台所のカマド近くに祀られるもので、火防の神、五穀豊穡の神としての信仰を受けている。このオカマ様は正月に飾ったシメを取りはずさないまま、毎年重さねていくのが特色で、砥上町のある農家では、建築以来シメは重さねたままという家もある。オカマ様は子沢山、あるいは36人の子供がいるなどという俗言を耳にすることがあり、小正月の時にはこのため沢山のカヌパンを供える所がある。また田植えが終ると、水口の苗を3株ばかり抜きとり、これを樹の中に入れてオカマ様に供えるという習俗は市内に広く見られる。

便所神の信仰の中で興味深いのは、生後7日目のお七夜の時、赤児の神参りが行なわれるが、本市などではまっさきに便所にお参りさせる習俗がある。赤児をだいた産婆が、便所に行き、紅白の水引きをまいた麻柄のハシでフンを食べさせるまねをするのである。今でも農家の便所裏に麻柄のハシが突きさしてあるのを見かけるが、これは便所参りの名残りである。なお便所でツバをはくと口がさけるという俗言が聞かれる。



六地藏尊

9、人の一生

(伊豆新・墓所) 伊豆の土一 (2)

(1) 埋め墓と参り墓



埋め墓
〔堀米〕



参り墓
〔堀米〕

(2) 堀米の両墓制

注-⑭

堀米の両墓は、埋め墓（一次墓）を「ラントウ・ラントウバ」、参り墓（二次墓）を「ハカバ・オテラ」と呼んでいる。

埋め墓には、二ヶ所の共同墓地と十数ヶ所の個人墓地があったが、個人墓地は現在数ヶ所しか認められず、それも埋め墓としての性格は失ないつつある。共同墓地は、田川の河原近くの西所（41坪）とやや高い平地に位置する一里（46坪）であり両墓地とも埋め墓としての機能を果している。

参り墓は、埋め墓が部落のはずれにあるのに対して、中心部に位置し（前田103坪）共同墓地となっており、百数十の墓石が林立している。

堀米の両墓は、参り墓、埋め墓とも祭地となっており、参り墓に石碑を建てる期日も一定しておらず、埋め墓に埋葬した後、参り墓への物的移動もみられない。

(3) 結納書注-⑮

(4) 送葬の列注-⑯

結納書（女物の場合）	
1、長熨斗	一折
1、末 広	一对
1、御 霙	一折
1、御祝儀	三包
1、金拾円也	一包
1、足 袋	一包
1、寿留女	二折
1、志良賀	二折
1、家内喜多留	一箇
1、御手拭	一通
右之通無相違候也	
明治三十三年二月八日何某	
上 様	

主人死亡の時		
	要 具	人
1	五色旗	組 内
2	松 明	
3	送り幡	
4	辻 籠	
5	四方幡	
6	位 牌	相続人
7	膳	妻
8	香 炉	長 女
9	机	近親者
10	枕 花	
11	生 花	
12	緑の綱	親 族
13	霊 柩	組 内

(5) 一生の儀礼 (清原・道場宿町)

注一⑱

①産 育

〔妊娠〕5ヶ月には岩田帯をしめる。さらし木綿1丈に犬の字を赤書して、戌の日に産婆の手によってしめる。

〔ぶんべん〕婚家で生むことが多い。普通の部屋です。近頃は病院でする者もある。〔お七夜〕赤飯をたき、親戚を招待する。近所の子供らには赤飯と銭を配る。近頃は菓子が多い。

〔21日〕嫁の実家から初着が届く。産婆が赤ちゃんを抱いて、初着を前から着せる。家中屋敷中を廻る。桑の枝か、麻がらで3尺ほどの箸をつくり、白紙で包み水引をかける。便所でフンをはさんで食べさせるしぐさをする。箸は便所の窓などに差して置く。親類、縁者は麻の葉模様の着物、着尺をおくる。

〔食いそめ〕女兒100日、男児110日、小さな食器、お膳をととのえ、赤飯、尾頭つきの御馳走で祝う。

〔新客〕日数は不定、嫁の実家に姑と赤子と客に行く。母子は2・3泊、姑は日帰り、帰りは実母が送ってくる。金包みを初着のひもに結んでくる。

〔誕生〕餅をつき、一升餅を背負わせて歩かせる。

〔七五三〕昔はやらなかった。現在は宇都宮の二荒神社まで行くものがある。

②結 婚

昔から媒酌人があって見合い結婚が多い。今もこの様式が多い。式日には婚の方から親がわりの親戚が数名媒酌人と嫁の家に迎えに行く。立ちふるまいの祝宴をしてから、嫁と親戚と連れだって婚の家に行き、結婚式を行う。終ってから親戚、縁者をまねいて披露の祝宴をする。嫁入りには大正年間まで、馬にあけ荷をつけ、嫁さんが振袖を着て、その上に座って乗って行った。昭和の中期までは人力車、現在は自動車となった。

〔三ツ目〕結婚式3日目に婚、嫁、媒酌人連れだって嫁の実家に客に行く、嫁の家族全員にそれぞれ土産物を持参する。

③還暦・喜寿・米寿の祝

昔はよほどの財産家でなくてはやらなかったが、近ごろこの風習は多くなった。

④葬 儀

組合でやる。昔は組合14.5軒ぐらいの家族全員が集まり、食事をして3日間ぐらい

すごしたので当家の食糧経費は大変なものであった。今はこれを極めて簡素化した。死亡通知には2～3里の所は組員が飛脚で行く。近隣は香奠を呈し、当家では配り物をする。葬列を組んで寺まで送る。現在も全部土葬である。字内の寺は真言宗大乘寺。隣字に臨済宗の同慶寺があり、檀家は大体半々である。

(6) 調査報告

① 出 産

産 の 場 所	実家のナンド①⑦ 婚家のナンド②～⑥ ⑧～⑪	後産をしま つた場所	ガイドコロ入口の外側 ③ 入口付近以外のガイドコロ⑪ ナンドの床下 ①④⑤⑧⑨ 庭の片すみ⑦ 墓場②
------------------	------------------------------	---------------	---

② 生児の儀礼

ま じ な い	セッチンマイリ ②⑤⑦～⑨ 額に字(印)を書く④⑩	名 つ け	家人②⑥⑪ 隣人③⑦ 神主①⑤ 行者・僧侶⑧⑨	初 誕 生	餅をつき、12個 (1升餅)をし よわせる。 ①④～⑪
------------------	------------------------------	-------------	----------------------------------	-------------	--------------------------------------

③ 婚 舎

④ 墓地と棺

婚家の ナンド ②～⑤ ⑧⑩⑪	婚家の ザシキ ①⑥	墓地の 呼び名	ハカ ①②④ ～⑥	ハカバ ①⑧⑨	ボチ ③	棺の 種類	たて棺 ①③④	ねせ棺 ①～③ ⑥⑧⑨ ⑪
--------------------------	------------------	------------	-----------------	------------	---------	----------	------------	------------------------

⑤ 死 の 忌

裏の期間	7 日	49 日	神かくしの方法	半 紙	笹の葉
	②⑪	①③④⑧⑨		①⑦⑨⑪	②③⑥⑧⑩⑪

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鶴内(平石) ③屋板(横川) ④東木代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(7) 解 説

近年はお産はほとんど病院ですが、かつては多くが第1子を実家で、第2子を婚家でしたものだった。産部屋は若夫婦の部屋であるナンドで、男は21日間この部屋には入れなかった。また産婦もこの期間中はケガレるといってみだりに他の部屋に行く

ことをきらったものである。

後産のしまつについてみると、一般には古くは家中、やがて時代が新しくなるにつれ家のまわりの庭、墓場へと移っていくようである。本市の場合ナンドの床下が最も多く、その他入口付近以外のダイドコロ、ダイドコロの外側、庭の片すみ、墓場などがある。なお、ナンドの床下に埋めるのは「後産はオテントサンに見せるものではない」というからだという。また庭や墓場などに埋める所では、「後産の上を1番最初に通ったものを子供は恐れるから、まずまっさきに父親にまたがせろ」という俗言も聞かれる。

人間オギャーと生まれてから死ぬまで様々な儀礼を受けるが、生後まっ先きに経験するのがお七夜の儀礼である。この時には氏神へのお参り始め、セッチンマイリを行う所が多く、また東木代地区、下欠下地区では犬の安産や子犬の成育のよいことにあやかって、赤児の額に犬の字を書く。

初誕生の時には、1升餅をついて子供が歩く時にはこれを背負わせる所が多い。そして子供が餅を背負って歩るいた時には、七転八起にあやかって子供を突きとばすもんだともいう。

結婚の形態についてみると、栃木県内あたりではかなり以前から嫁入り婚が主流だった。婚舎はこの嫁入り婚の場合、婿方の家でほとんどはナンドである。

墓地というと多くの人々は、埋める所すなわちお参りする所としているが、世の中には、埋める所とお参りする所とが別々になっている所がある。このような墓を民俗学上では両墓と呼び、最近調査研究が進むにつれ、各地でこの事例が確認されている。

本市でも豊郷の堀米でこの例が確認されており、埋め墓をラントウ、ラントウバ、参り墓をハカバ、オテラと呼んでいる。

棺は最近はねせ棺が多かったが、古くはたて棺が用いられた。本市でも野高谷地区、屋板地区、東木代地区でたて棺がみられる。

死の忌については、喪に服する期間を49日間とする所が多い。しかしその年の正月はしないとか、1年間は祭りに参加しないとする所もかなり多く見うけられるようだ。神かくしの方法は、神棚の前に笹の葉をさげる、半紙をさげるの2通りの方法がとられている。

10、祭りと年中行事

日産の妙高山堂二宮御宇（上）

(1) 行事の様子



どんど焼き 〈崖板〉



天王祭 〈石那田〉



大盛飯 〈野高谷〉



ほうじぼ 〈横山〉



花祭り 〈石那田〉



えびすこう 〈中祿井〉

(2) 宇都宮二荒山神社の祭日

注-18

10月21日 秋山祭 此祭日は最も重大なる祭日なれども氏子其他之れを知る者少し但学校生徒の参拝は此日を以てす。

10月27、28、29日三日間 此日は、菊水祭とも称す。神輿を渡御し各町にては思い思いの余興を出せども近年はそれをも少なくなれり、神輿は隔年上町と下町とを前後にす、私祭なるも秋山祭より世に知らる、夕方は馬場に於て流鏝馬あるを例とす。

12月4日 御田主祭、又秋山祭を大湯と称するに對し小湯とも称す、新嘗祭なり。

12月15日 冬渡祭

1月15日 春渡祭 おたりやと云う、中夜神輿を後門より渡し御旅所に於て豊年踊などの神事ありて尾上町、杉原町、鉄砲町、曲師町を経て正門より還御す、此日は市内の商店家業を休み慎んで慶賀の意を表せり、近郷の老若男女は早朝より参拝する者多く午後二時頃に至れば交通も絶えんばかりの人の山をなす、鉄道省にては特に汽車賃の割引をなすに至る、其中にも馬場町最も群集す。

2月17日 祈年祭

4月11日 花会祭

(3) 石那田八坂神社の天王祭

注-19

篠井の祭例のうち、最も最大なものは、石那田の天王祭である。天王祭は、石那田の鎮守である八坂神社の祭りで、屋台が引き回され、近郷近在より、多くの見物人が集まる。

この祭りは、石那田の仲内、坊村、原坪、桑原、仲根、六本木の7部落によって行なわれる。祭りの様子を日を追って記すと、およそ次のようになる。

7月1日 世話人の寄合

各部落より、氏子総代と世話人2名および区長が坊村の「オカリヤ」に集まり、屋台を出すか出さないなど祭りの相談をし、その結果は、その日の内に部落に帰って報告した。

7月7日 神体渡御および道普請

この日は、岡坪地内の八坂神社より、坊村の「オカリヤ」へ御神体を移す神事が行なわれる。また、石那田の全戸より、1人ずつ出て、屋台の通る道を補修する。

7月13日 屋台の組立、囃子の練習

この日に各部落とも「ワカシグミ」によって、屋台の組立てと、飾り付けが行な

われなお、囃子の練習もこの日に行なわれる。

7月14日 神体上遷

夜半（午前10時頃）各部落の屋台が「オカリヤ」に集まり、神官、区長、氏子総代、世話人などの手により、神体が屋台と共に、八坂神社に上遷する。

7月15日 屋台の解体、用具の引き継ぎ

朝方、屋体は、神社より各部落に帰り、「ワカイシグミ」の手によって、取りこわされる。また、この日のうちに翌年の世話人が決められ、提燈、囃子の道具が引き継がれた。以上が祭りのあらましである。

本殿より仮殿に移された神体は、7日間各部落の氏子総代、世話人が交代で御神酒を上げたりして守護し、この間に五穀豊稔・家内安全などを願って、氏子が多く参拝する。

神体の上遷に際して、屋台は、7部落のうち6部落より出され、仲内よりは神楽一組が参加する。

屋台、神楽は原則として、毎年操り出されたが、災害、凶作等により、経済的に苦しい年は出すことを控えた。

隊列は、仲内の神楽（獅子2、天狗1、供3）を先頭に、桑原、原坪、六本木、岡坪、仲根、坊村の順に屋台が続いた。

屋台には、囃子方など12人でいどが乗り、その引手は、家族総出で行なわれた。引き手は、赤飯のにぎりめしや、にしんをかじり、酒を飲むなどしながら屋台を引いた。石那田の人は全て、屋台引きにかり出されるため、囃子方（太鼓3、笛1、鐘1、つづみ2）は、近在の人を頼んで行なわれた。この囃子方には、希望者が多く集まり、人選に苦勞したこともあった。

（4）野高谷の強飯

注一⑳

- 行事名 三島神社強飯式—大盛飯—
- 行事日 11月28日（以前は旧の11月28日）
- 場所 宇都宮市野高谷町739番地
- 伝承団体 野高谷町の6班（上・東・下・北・台・西の各班）
- 強いる物 飯
- 関係社寺名 三島神社（祭神 大山祇命）
- 行事経過 11月28日—よいまち

※()内は旧暦で行われていた頃の様子。

9時 祭りの大当番〔オトウバン＝マツリトウバン〕の家に他の5班の当番が集まり、神社に奉納するメ繩を作り、正午頃までに神社に掲げる。

2時(5時)頃、上・東・下・北・台・西の各班の当番の家に班内の人々が集まり宴会が開かれる。ここで飲む酒の量はおよそ2・3升で飲み終わったころ、当番の引き渡しが行われる。引き渡しは、上座に着席しているトウバン(当番一今年)ジョウトウバン(上当番一昨年の当番)シタトウバン(下当番一来年の当番)の順にハンギリからおよそ5合(昔は1升であった)の飯が盛られる。飯は新米を用い盛るのは当番の組内の人によって行われた。飯は本膳の碗を用いるので、普通に盛ることは出来ない。そこで、ハンギリのはしでへらを使って飯を棒状にし、それを井桁に組んで、ハシで支えた。当番の人は、食べ終わるまで家に帰ることが出来なかったため、相撲を取ったり走りまわったりして、飯を食べるのに努力をしたという。

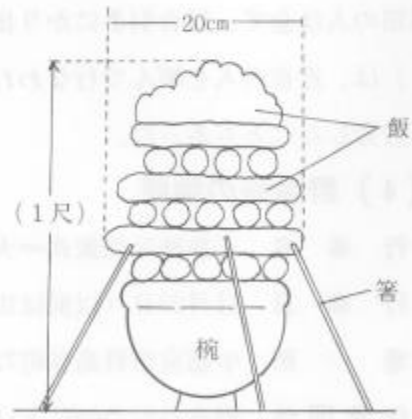
引き渡しの席

(上座)



高盛飯

(1升の場合)



(5) 調査報告

旧暦 月日	呼び名	行事内容	
1	○ガンジツ①~⑪	・早朝、若水をくむ①~⑪・朝食はぞうに①・赤飯を作 て神に供える⑤	
1 3	○サンガニチ①~⑪	・三が日は仕事を休む①~⑪・三が日は醤油を使わない ④	
4	○アワメシ⑨	・うるち粟を使ってめしをたく⑨	
6	○ヤマイリ①~⑪	・山に入ってもよい①~⑪・福ばしを作る①~⑪〔餅、 にはし、米①②餅、わかさぎ、米④米、わかさぎ、干納 豆⑤米、にはし、納豆⑥餅、こんぶ、わかさぎ、納豆⑧ 米、にはし⑨〕	
7	○ナナクサ①~⑪	・七草かゆを作って食べる①~⑪	
11	○クワイレ①~⑪ 〔カラス呼びの供物〕	・細で鳥よばりをする①~⑪〔餅、にはし、米①餅、に はし③餅、わかさぎ、米④米、納豆、塩びき⑥米、餅⑨〕	
14	ドンドンヤキ①④⑩⑪ (トリヤキ②⑤⑧⑨) (トリマゼ③⑪)	・お飾りを集め田で焼く①~⑤⑧~⑪・若餅を作ってま ゆ玉を作る①・まゆ玉団子を飾る②~④⑤⑧⑨~⑪・団 子を焼いて食べる③	
15	○アズキガユ①②④⑤⑦~⑪ (アズキメシ⑥)	・小豆かゆを作って食べる①②④⑤⑦~⑪・もちばしを 作りこれにかゆをぬり門松の抜いたあとにさす①④・ふ くばしを36あるいは100ぜん作る⑨	
1	20	○ハツカショウガツ②~④⑥ ~⑪ ○エビスコウ①④⑤⑧⑪	・お供えをくずし、しるこやぞうにを作った②~④⑥~ ⑪ ・えびす、大黒に煮しめ、飯、魚を供える①・一升ます に錢を入れてえびす様に供える④⑤⑧⑪ ・女衆が集まって念仏を唱え会食する③④
23 24	○オジゾウサン③ (オジゾウサマ④)	・天神様の祭り③④・天神様の境内で子供ずもうを行な う④	
24	○テンジンサン③ (テンジンサマ④)	・天神様の祭り③④・天神様の境内で子供ずもうを行な う④	
28	○アズキメシ⑥ ○ショウゼンサマ⑤ (ゾウゼンサマ⑨) ○フドウサマ⑤⑨	・小豆めしを作って食べる⑥ ・玉田の勝善へ馬に乗って詣うでる⑤・岩崎観音へ詣う でる⑨ ・女は多気の不動様へ参拝する⑤⑨	
8	○ハリクヨウ⑥⑨ ○コトハジメ②~⑥⑧~⑪ (ダイマナク①⑦)	・針仕事を休む⑥⑨ ・めかいを竹竿に付けて屋根に立てる①~⑪・笹神様を 家の前に作る①~⑪	
2	10	○チチンサマ③⑧⑨ ○コンピラサマ⑤ ○フダゴト⑧ ○セツブン①~⑪ ○ハツウマ①~⑪	・団子を作る③・餅を作る⑧⑨ ・餅をつきしるこを作る⑤ ・古峰神社の札を各戸に配る⑧ ・豆まきをする①~⑪ ・しもつかれを作り稲荷に供える①~⑪
3	○ヒナマツリ① (セック②~⑪)	・おひな様を飾り、草餅を作る①~⑪	
2	10	○コンピラサマ①⑧ ○ヒガン①~⑪ ○ムギゴト⑤⑨	・当番の家に集まり会食をする①・みこしをかつぎ各戸 を廻る⑧ ・団子を作り先祖の霊を供養する①~⑪ ・草餅を作り古峰神社の札を立てる⑤⑨
4	8	○オシャカサマ①~⑪	・釈迦像に甘茶をかける①~⑪
15	○ライジンサマ④	・雷電神社のお札を苗代にさして祭る④	
5	5	○セック①~⑪	・鯉のぼりを立て柏餅を作る①~⑪

旧 曆	呼 び 名	行 事 内 容
月 日		
6	1 ○ムクレツイタチ④～⑥ (ムケノツイタチ④⑤) (ムケツイタチ①)	・笹餅を作る①・小豆めしを作る⑤・おこわを作る⑩
	8 ○マクワハズシ④	・仕事を休む④
	13 ○テンノウサイ④	・まんじゅうを作る④
	14 ○テンノウサマ①	・とうろうを三島神社に奉納する①
	15 ○テンノウサマ⑤	・八坂神社に集まって会食する⑤
	27 ○ムシオイ④	・部落の中を鐘を鳴らしながら巡回する④
7	1 ○カマノフタ④⑤ (カマゴタ⑤⑧)	・仕事を休み米の飯を作る④・餅をついた⑤⑧
	7 ○タナバタ①～⑪	・七夕飾りを作る①～⑪・団子を作る⑥・小麦まんじゅうを作る⑨・幕そうじをする①②④⑤⑨
	13 ○ムシオイ	・7日あるいは倍数の14又は21に田でみこしをかつく③
	16 ○オボン①～⑪	・仏壇に季節の供物をし幕参りをする①～⑪
	○カザマツリ①	・団子を作る①～⑪
	○カザマツリ①	・21日に雨ごいをする①
8	1 ○ハツサク②④⑤⑨	・仕事を休む②④⑤⑨
	15 ○ジュウゴヤ①～⑪	・おはぎを作る①・すすき、団子、柿等を供える②～⑪・ほうじばを打って廻る①～⑪
9	13 ○ジュウサンヤ①～⑪	・おはぎを作る①・すすき、団子、柿等を供える②～⑪・ほうじばを打って廻る①～⑪
	29 ○オクンチ④ (オクニチ⑤⑨) ○ヒガン①～⑪	・米の飯とけんちん汁を作る④・甘酒を作る⑤⑨ ・団子を作り先祖の霊を供養する①～⑪
10	10 ○タノカミサマ① ○イナリサマ① ○チチンサマ③⑧⑨ ○トウカンヤ⑦	・餅をつき神棚に供える① ・甘酒を作る① ・餅をつく③⑧⑨ ・餅をつく⑦
	20 ○エビスコウ④⑤⑥⑨	・けんちん汁を作る⑤⑥⑨
	15 ○ウジガミサマ④	・赤飯を作り氏神に供える④
11	18 ○レイサイ⑨	・加波山神社の祭りで甘酒を作る⑨
	24 ○ワタゴサン⑧	・甘酒を作る①
12	1 ○カピタリ① (カピタレ⑤⑧) (カワピタレ⑥⑨) (カワピタリ⑦) (カワピタレ⑩) (カワピタレ⑪)	・餅を川に投げ入れる①⑤～⑪
	8 ○コトジマイ①②⑤⑥⑨～⑪ (ダイマナク①⑦) (コトゴトノオシマイ⑧)	・めかいを竹竿に付けて屋根に立て、笹神様を作る①②⑤～⑪・そばかきを作る①・ねぎを焼いて食べる⑥・ひいらぎに唐がらしとねぎをさす⑧
	26 ○モチツキ①～⑪ 28 ○オカザリ①～⑪	・正月用の餅をつく①～⑪ ・新年を迎える準備をする①～⑪

※調査地区 ①野高谷(清原) ②鴉内(平石) ③屋板(横川) ④東木代(瑞穂野) ⑤下川俣(豊郷) ⑥西田中(国本) ⑦坂本(城山) ⑧大網(富屋) ⑨中篠井(篠井) ⑩下欠下(姿川) ⑪羽牛田(雀宮)

(6) 解 説

ここでは家の祭りである年中行事についてのみ述べる。本市で行なわれている年中行事は、ほぼ表のとおりであるが、ここではおもなものについて解説する。

●ヤマイリ

平地林の多い本市は山間地でなくともたいていの農家でいわゆるヤマを所有している。このヤマでの仕事始めの日が、本市あたりでは1月6日で、この日は戸主が供物を山へ供え、山仕事の安全を祈り、帰りに小正月に使う木を切ってくる。なお、供物の中に干納豆や納豆を供える所があるのは興味深い。

●クワイレ

1月6日にヤマイリが行なわれるのに対し、田畑仕事始めの儀礼であるクワイレが本市では11日に行なわれる。この日は畑に行き行って小さくうねを3うねうない、そこに松、幣束をたて、各うねに供物を供える。そしてそのあと「カラス、カラス、カラス」と鳥呼ばりをし、どのうねの供物を鳥がつかばむかによって作付の豊凶を占う儀礼を行なうのが一般的である。

●ドンドンヤキ、アズキガユ

1月の14、15日を小正月といい、この時にはドンドンヤキやアズキガユの行事が行なわれる。14日は朝松をさげたあとにマユダマゲンゴやアワボ、ヒエボなどの作り物を飾る。さげた松は村の子供達もって行き、夕方これをあつめて燃やす。燃やす松はただ一カ所に集めて重ねるだけではなく、小屋をつくるのが一般的で、これをトリゴヤと呼んでいる。中に子供達が入り餅を焼いたり、甘酒をわかしたりする所もあり、その後火をつけて燃やす。この松を燃やすことを本市あたりではドンドンヤキと呼ぶ所が多いが、トリゴヤ、トリマゼと呼ぶ所もある。

翌15日の朝はアズキガマを炊いて食べるのがならわしである。まずモチバシとかカユカキボウとかと呼ばれるヌルデ（ノデンボウ）で作ったハシでカユをかきませ、そのハシを年神棚始め各神棚に供え、ついでこのアズキガマを真中が太くなったハラミバシで食でる。なお、このカユバシはその後とっておき、初雷の時に落雷しないようにイロリで燃したり、苗代しめの時水口にお札をはさんで立てたりする。

●コトハジメ

2月8日をコトハジメ、コメヨウカあるいはダイマナクという。この日本市内では、母屋の軒先きにメカイを竹竿に付けて飾りつけたりするが、これは沢山目のあいたメ

カイを用いることによって、1つ目である厄神を除けるのだという。なおダイマナクとは厄神をにらみつける大きなマナコの意である。またこの日、笹竹を3本たてて頂部を結んだ笹神様を庭先きに祀る所がある。

●ジチンサマ

2月10日をジチンサマと呼んでいる。ジチン様がやってくる日といわれ、団子や餅を月の数程つくり台所の臼にマスの中に入れて供えたりする。

●セツブン

調査結果だけでは豆まきをするということだけになっているが、この日は、イワシの頭を豆柄にさし、ソバをつけながら焼き、各戸口や便所、井戸など豆をまく所にさすならわしがある。

●ハツウマ

2月の最初の午の日を初午といい、本市内では、前日に作ったシモツカレを赤飯とともにワラットに入れ、「正一位稻荷大明神」と書いた五色の旗を持って稻荷様にお参りする。

●五月セック

3月3日のセックが女のセックに対し、5月5日のセックは男の子の成長を祝う男の節句である。ここでは鯉のぼりを立て柏餅をつくるのみとなっているが、本市内ではこの他母屋の軒先きにヨモギとショウブを飾りつけ、この他ショウブ酒をのみ、ショウブ湯に入る風習が見られる。ショウブ酒をのんだり、ショウブ湯にはいるのは特に女がするものだともいわれているが、これはへびの子を宿さないためなのだといわれる。

●カマノフタ、七夕、オボン

7月はお盆の月である。普通お盆というと7月13～16日の間をさすようであるが、実際には7月1日からその準備が始まっている。7月1日をカマノフタあるいはカマツブタという。地獄の釜のフタがあく日で亡者がお盆に供え旅立つともいわれている。この日は小麦マンジュウをつくったり、餅をついたりし、台所の大釜に供えるところもある。

七夕は星祭りとして解釈している人が多いが、農家で行なわれている行事内容を見ると、墓掃除を行なうなど盆の準備としての行事が色こくみられる。

13日を迎え盆といい、この日は夕方チョウチンを持って墓参りをする。盆飾りは仏

壇とは異なった庭に面した縁側などに設ける。棚にはソウメン、ワカメ、ホウズキなどをかけ、台にはイモやハスの葉の上にのせたキュウリやナスでつくった馬を飾る。なお本市内ではこの盆飾りの棚に麻柄を使う所が多い。16日は送り盆で、この時には墓参りをするが、盆の供物は途中の道端に供なえるという所が多い。

●カザマツリ

稲の収穫を目前にした210日前後は、また台風が被害をもたらす季節でもある。このため各地で風の害がないことを祈る風祭りが行なわれている。栃木県下では、この時に獅子舞の奉納や天祭を行なう所が多いが、本市内でも新里町神郷地区、関堀地区、飯山地区などで獅子舞が、砥上地区、野尻地区、上籠谷地区などで天祭がそれぞれ行なわれている。

●ジュウゴヤ、ジュウサンヤ

旧暦8月15日を十五夜、9月13日を十三夜と呼び、それぞれ月見が行なわれる。この時には、ダンゴをつくりサツマイモ、サトイモ、クリ、カキなどの秋の収穫物それにススキなどを供える。庭に面した縁側などにチャブ台の上に供えて飾る例が多いが、家によっては箕の上にこれら供物を飾る所もある。またダンゴは作らず、赤飯やボタモチを作るのを家例とする家も多い。なお、この十五夜、十三夜には、子供達が新ワラを束ねたものを持って各家々をめぐり庭先きでボウジボを行なう。

●ヂチンサマ、トウカンヤ

旧10月10日をヂチンサマとかトウカンヤといっている。この日はヂチンサマの使いであるカエルが餅を背負って天に帰るのだといわれ、各地で餅をつく。

●カピタリ

この日は水神様の祭りだという。餅をついて川に供える。

●シワスヨウカ

2月8日に対し12月8日をシワスヨウカとかコトジマイなどという。2月8日と同じくメカイをたてかけたりするが、笹神様はこの時は、2月8日と異なって母屋の裏庭につくる。

11、民俗芸能

(1) 奉納の様子



二荒神社の神楽 <馬場通>



八坂神社の神楽 <今泉>



宗円獅子舞 <新里>



新清流長島五段囃子 <御田長島>

(2) 瓦谷の神楽

注一②

瓦谷の太々神楽は、「大和流太々神楽」と称し、江戸時代中期より伝承されてきたらしい。

明治初年より旧1月28日（昭和41年より1月5日）恒例の行事として部落の鎮守である平野神社に奉納される。

また、宇都宮二荒山神社へも、明治の初期より戦前までこの神楽が奉納されていた。神楽の舞・御囃子等の技術は、代々瓦谷の人々に受けつがれ、今日までその技術は立派に伝承されている。

(3) 飯山の獅子舞

頁一〇三 注一②

飯山の獅子舞は、栃木県北部に広がる関白流の流れをくむ一人立三匹獅子舞であり、比較的一般的なものである。

この獅子舞は、8月15日に阿蘇神社に奉納されるものである。この獅子舞は、部落の青年によって伝承されて来たが、戦後は、愛好者によって維持されていた。戦前は、お盆の15～17日夜通し町内をねり歩き、非常に賑かであり「ニンギョウジ」と呼ばれる若者の代表(世話人)を中心に行なわれた。

上演される舞は、神楽舞、弓くぐりの舞、本庭の舞の三庭からなり、この獅子舞の前技として棒の舞(剣の舞)も行なわれる。その他の付きものとしては、ヒョツトコ踊りも行なわれ、その道化ぶりを発揮する。神楽舞は「千はやぶる、神の御前を通るときよろず不じょう、きえんざんもの」として阿蘇神社に奉納する祭の舞であり、弓くぐりの舞は、タイコ獅子と雄獅子が弓をくぐりぬけるものであり、さらに、本庭の舞は、別名夜の舞ともいわれ、いも堀りの場面や、雌獅子隠の場面が見られる。

獅子舞の準備

8月7日、この日を「ハナフキ」と称している。この日は獅子舞の際に使用される道具の確認、修理などを行なう。

8月8日、夜、区長の家には14～15人ぐらいが集まり、8時頃より約2時間稽古が行なわれ、12日まで続く。

8月15日、当日は区長の家に集合し、衣裳を付けて、阿蘇神社までの道すじを練り歩く。

午後2時頃より、阿蘇神社の境内で奉納が行なわれ、終るのは日暮頃である。

8月17、18日には、世話人の家、村の道辻などで厄病を防ぐための獅子舞が行なわれる。

(4) 民俗芸能一覽

注一⑳

	名 称	所在地区(町)	由 来 ・ 沿 革
獅子舞	宗 円 獅子 舞	国本(新里町)	宇都宮初代城主といわれる宗円ゆかりの獅子舞といわれ、日枝神社に伝わっている。(市指定)
	関 堀 の 獅子 舞	豊郷(関堀町)	紫辰殿獅子藤原角輔流を名乗る1人立3匹の獅子舞で、毎年8月に奉納されている。(市指定)
	飯 山 の 獅子 舞	篠井(飯山町)	天下一関白流を名乗る獅子舞で、飯山の鎮守である阿蘇神社に8月奉納されている。(市指定)
神楽	八 坂 神 社 の 神 楽	旧市内(今泉町)	岩戸神楽の一種で、元は神田流より発していると思われ、江戸中期から引継げている。(市指定)
	瓦 谷 の 神 楽	豊郷(瓦谷町)	江戸中期から大和流太々神楽として平野神社に伝わっており、毎年1月に奉納される。(市指定)
	二 荒 山 神 社 の 神 楽	旧市内(馬場通)	江戸系統の神田流の流れをくむ太々神楽で、毎年1、5、9月に上演奉納されている。(市指定)
囃子	飯 田 町 天 祭 保 存 会	城山(飯田町)	飯田町に古くから伝わる天祭行事の際奉納される囃子である。
	小門吉兵衛流飯田囃子方	城山(飯田町)	安政3年、飯田の御子貝氏が、宇都宮小門町の吉兵衛氏から伝授されたものである。
	瓦谷町上新宿流お囃子保存会	豊郷(瓦谷町)	天祭行事と共に江戸時代末期から始まったが、大正年間鷹嘴氏が新宿流を習得し独特のものとした。
	徳次郎お囃子保存会	富屋(徳次郎町)	江戸時代前期に智賀都神社の祭りに引き出される屋台と共に誕生したものである。
	砥上町囃子方保存会	姿川(砥上町)	砥上町に伝わる天祭行事と共に発達してきた囃子である。
	下川岸お囃子保存会	平石(石井町)	嘉永年間から大杉様及び天祭行事の際、行われてきた囃子である。
	新清流長島五段囃子保存会	雀宮(御田長島町)	明治初期に全国を放浪していた鶴見清一郎という人から伝授されたと伝えられている。
	石那田屋台囃子坊村保存会	篠井(石那田町)	八坂神社例祭に引き出される屋台に附随して、明治初期に始まった五段囃子と称している。
	石那田屋台囃子原坪保存会	〃	〃
	野尻長坂天祭保存会	城山(下荒針町)	下荒針の野尻に伝わる天祭と共に始まったと伝えられる囃子である。
砂田町佐作流囃子保存会	横川(砂田町)	明治の中頃誕生したが、昭和初期に加藤作太郎氏と真分佐治氏により生みだされた佐作流となる。	
その他	宇 都 宮 蔦 木 遣 り	旧市内	日光東照宮の造営にたづさわった名工たちの間で唱われていたものが原形といわれている。(市指定)
	堀 米 の 田 楽 舞	豊郷(関堀町)	堀米の6軒の家で世襲で伝えられている舞で、宇都宮二荒山神社の祭事に年3回奉納される。

(市指定)は宇都宮市指定無形文化財

(5) 宇都宮の屋台

注-24

名称	種類	所在地区 (町)	公開行事	名称	種類	所在地区 (町)	公開行事
祭屋台	山車	旧市内 (星が丘)	二荒山神社	中郡天祭	天棚	瑞穂野 (上桑島町)	風祭
・火焰太鼓山車	〃	旧市内 (伝馬町)	菊水祭付祭	上の島の天棚	〃	豊郷 (瓦谷町)	天祭
神功皇后出車	〃	旧市内 (小幡町)		海道町の天棚	〃	豊郷 (海道町)	〃
龍花鳥屋台	〃	旧市内 (伝馬町)		下川俣の天棚	〃	豊郷 (下川俣)	〃
鶴松竹梅屋台	〃	旧市内 (西3丁目)		屋台	山車	国本 (宝木町)	〃
屋台	〃	旧市内 (大工町)		天祭	天棚	国本 (新里町)	〃
〃	〃	旧市内 (宿郷町)	八幡例大祭	西根の屋台	山車	富屋 (徳次郎町)	智賀都神社
下柳田天棚	天棚	平石 (柳田町)	天祭	田中の屋台	〃	〃	大祭付祭
上柳田天棚	〃	〃	〃	門前の屋台	〃	〃	〃
久部新谷天棚	〃	平石 (石井町)	〃	舞台付屋台	〃	〃	〃
中平出天棚	〃	平石 (石井町)	〃	下町の屋台	〃	〃	〃
天道祭飾棚	〃	平石 (石井町)	〃	四方花鳥屋台	〃	〃	〃
福島天棚	〃	〃	〃	大網の天祭	天棚	富屋 (大網町)	天祭
岡天棚	〃	〃	〃	桑原屋台	山車	篠井 (石那田町)	石那田
天棚	〃	清原 (板戸町)	〃	六本木屋台	〃	〃	八坂神社
〃	〃	〃	〃	原屋台	〃	〃	天王祭付祭
〃	〃	〃	〃	岡屋台	〃	〃	〃
〃	〃	清原 (永室町)	〃	仲根屋台	〃	〃	〃
〃	〃	清原 (上籠谷町)	〃	坊村屋台	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	鶴田の天棚	天棚	姿川 (鶴田町)	天祭
〃	〃	清原 (板戸町)	〃	下欠の天棚	〃	姿川 (下欠町)	〃
昇龍山車	山車	横川 (台新田町)	〃	上欠の天棚	〃	姿川 (上欠町)	〃
四方破風屋台	〃	〃	〃	砥上の天棚	〃	姿川 (砥上町)	〃
昇龍下籠	天棚	横川 (上横田町)	〃	天棚	〃	国本 (新里)	〃
花屋台	山車	雀の宮 (御田長島町)	風祭	〃	〃	清原 (板戸)	〃

○印は県指定 ・印は市指定文化財

12、歌 謡

香蘭の宮 注一(25)

(1) 田植の様子



〈上篠井〉

(2) 労働歌

①篠井の金堀唄 (市指定無形文化財)

ハ……

曇るがんがら宝の山よ

星に黄金が流れ出る チンチン

ハ……

抗夫さんなら来ないでくれ

ハ……

佐竹奉行は己等の主よ

一人娘の気をそそる チンチン

恵みあつきで精が出る チンチン

ハ……

ハ……

夫婦揃って黄金を堀れば

右に鉋持ち左に打金

女房笑顔で背負い出す チンチン

一つ打つ度び火花散る チンチン

②田植歌 (瑞穂野)

ア、坊様々々名ばかり坊様、肴たべたり、女とねたりホ——

イ、筑波掛越し真壁の茶屋へ、花を一枝忘れて来たが、後で咲くやら咲かぬやら

ホ——

ウ、富士の白雪朝日で解ける、とけて流れて三島の宿へ、三島女郎衆の化粧の水

エ、日暮小松原シヨナシヨナ行けば、松の露やら我涙やら、雨も降らぬに袖絞る
オ、出羽の羽黒の出羽釣鐘は、撞いて離せば千里も響く
カ、奥州街道に本宮無けりや、何をたよりに奥まいり
キ、多気の不動様7日の籠り、腰の痛いのがすくなほる

(ア、イ、エ、オの他に次の歌詞が城山にある)

ク、八百屋お七は米沢おばこ、色で我が身を焼きすてる
ケ、太郎地神様おしゃらく者よ、紺の手さしにつまをり笠よ
コ、娘よいのかこはくの帯は、誰れも見たがるしめたがる
サ、おらがわかいときや、あまやが宿で、むしろふとんで下駄まくら
シ、那須の余一は三国一の、男美男で旗頭
ス、そろたそろたよ植手が揃った、稲の出穂よりようそろった
セ、いざり勝五郎車にのせて、引けよ初花箱根の山に、引けばまもなく権現様よ
ソ、わしにあいたけりや菜畠において、菜の根枕で菜の葉をすいて、かぶはひし
やげる菜の葉は揉める
タ、城はよい城大阪の城、四方白壁八っ棟作り
チ、何か様子のアルミの指環、買ってやるのははめる気か
ツ、つばきつけつけ毛をなであげて、ぐっとさしこむ筆のさや

③苗取り歌(篠井)

ア、あさくうさの い~ちのおみやげに

なになあにをもらった、はまゆうみに、でまり

はごいたおにのめん、きんぱくねったやうなだるまさま

④草刈歌(篠井)

ア、わしと行かぬか朝草刈りにヨ、草のない山ヨななめぐり

イ、いくら通ても青葉の山はヨ、色のつく木はヨさらさない

ウ、馬の背に乗り朝草刈りにヨ、唄で山路をヨ越えて行く

エ、いきな小唄で草刈る主のヨ、お顔見たさにヨ回りみち

オ、草刈負けたらななばらやばらヨ、それで負けたらヨ鎌をとげ

カ、曇りゃ曇りゃんせガンガラ山ヨ、どうせ篠井はヨ山の中

キ、嫁に行きたや篠井の里にヨ、夫婦揃ってヨ共かせぎ

ク、篠井山中三軒屋でもヨ、住めば都でヨ花が咲く

ケ、篠井よいとこ一度はおいでヨ、里にや黄金のヨ米がなる
コ、おまえ百までわしゃ九十九までヨ、共にしらがのヨ生えるまで
(アの他に次の歌詞が富屋にある)
サ、障子明ければ門前、田中、なぜか西根は森のかげ

⑤木挽歌(清原)

ア、ほれてつまらぬ山小屋木挽、山が終へれば泣別れ
イ、木挽や山かの山小屋住へ、熊や狸がお友達
(には住むが、木の実、かやの実食べはせぬ)
()は富屋と篠井で歌われている。

⑥土築歌(城山)

ア、ここは大事な大黒柱、心そろへてたのみますサンヨサンヨサンヨ
イ、この子よい子だ牡丹もち顔で、きなこつけたらなおよかるサンヨサンヨサンヨ
(清原には次の歌詞がある)
ウ、此所てはやらぬお江戸ではや三年はいから四十島
どうつき柱に根がはりさうた、さよー
みなさ一息たのみます、さよーんやらやあ
此所はだいじな隅柱皆さん一息たのみます

(3) 童 歌

①子守歌(横川)

ア、ホラヨイヨイホーラヨイ、お母さん信太へ帰るから必ず親だと思ふなよ
イ、ホラヨイヨイホーラヨイ、ねんねがお母さんどこへ行ったんべ、かんから鹿
沼へあっぽち買いに、あっぽち買って来て誰にやるべ、東京にやちん縮緬の
縮緬ざかり、田舎じゃおんほろほんの襦袢糞(ぼろくそ)盛り
ウ、坊やは善い子だねんねしな、痛くもははりで撫でるもははりでねんねしな
エ、坊ちゃんが母は何処へ行った。鹿沼の市へとおっば買いに、あっぽち買っ
て来て誰に喰はせて育てませう。
オ、ねんねんねねしなねんねしな、泣くとお化に食はせるぞ
カ、ねんねろさんねろ酒屋の子、酒屋で貰ったこの子供、だんだん育てて乙守子、
泣くと長持負はせるぞ
オ、坊やはお利口だから寝んねしな、坊やのお守はどこへ行った、かんから鹿沼

へ饅頭買ひに、坊やが起きたら皆上げやう、よいよい由兵衛の甘酒は甘いか
辛いかなめて見な

キ、坊やも負けずに早眠れ、あれ見よお日さんも今眠るかあかあからすや、ちゅ
うちゅう雀、一所に眠ると飛んで行く、ねんねは楽しき夢の国、金銀珊瑚樹
花が咲き、其所には奇麗な鳥も居て、あしたの朝まで泣いてゐる。坊やも負
けずに早眠れ、あん見よお日さんも今眠る

ク、ねんねんねんねんねんねしな、泣くと長持つぶちこむそ、笑ふと草鞋を穿か
せるぞ、眠るとねずみに引かせるぞ

ケ、乙守は楽な様でこわいもの、雨風吹いても宿はなし（レ）ねんねろねんねろ
ねんねろねよ（お母さんに叱られ子にや泣かれ）、眠って起きたら何遣るべ、
ちっちと団子を遣るからよ、泣くと長持背負せるぞ、笑ふとわらの中へぶち
こむそ、ねんねろねんねろねんねろよ

コ、坊やはよい子だねんねしな、坊やのお守は何処へ行った、あの山越えてお里
へ行った（海山越えて里越えて）、お里のおみやに何貰ろた、でんでん太鼓
に笙の笛

（ ）内の歌詞は瑞穂で歌われている。また瑞穂野には次の歌詞がある。

サ、ほーらよいよい由兵衛殿由への作りの甘酒は、甘いか辛いか当て見ろ、甘く
も辛くも何共無い

シ、ねんねん猫の尻火がついた、おばあさんがたまげて水かけた、ねんねん猫の
山白坊丈、一匹吠えれば皆吠える

ス、坊やは善い子だねん寝しな、ごーと寝ておきたら何上げよ、赤いごんこにと
と上げよ

セ、ねんねんねんねん酒屋の子、酒屋で嫁取るうれしかろ嬉しい間もなく子が出
来た、其子を育てて何所へやる。かんからかのみへ嫁にやる

（篠井には次の歌詞がある）

ソ、おともり子守はつらいもの、雨風吹いても宿はなし
タ、松葉の下へと昼ねして、松葉にさされて目がさめた

（清原ではこの他に次の歌詞がある）

チ、おともりっちゃ楽なようでつらいもの、雨風吹いても宿がない、人の軒端に
立寄れば、おつさんにゃ叱かれ子にゃなかれ、どうしてあんなにつらいも

の、ねんねんねんこしなねんこしな

ツ、ねんねん三年酒屋の子、酒屋で嫁とってなんでおんだした。おんだす嫁なら
なんで貰った、おっかさんが貰いていからわしや貰った
テ、ねんねん小山の小兎は、どうしてお耳が長いのか、おっかさんのお腹に居た
時に、椎の実桑の実たべたので、それでお耳がお長いの、坊やはよい子だね
んねしな

②羽ねつき唄(瑞穂野)

ア、一人来な、二人来な、三人来たら寄ってぎな、いつ来てもむかし七子の帯を
八の字にしめてくるっと回って一丁よ(いっかんしょ)
イ、お豊さん、嫁に来な、箆笥長持もって来な、お豊さんが御年始はしっちやも
んでちゃらもんで後から見れば七子の帯を八の字にしめてくるっと回って一
丁よ

ウ、お羽黒、こ羽黒おくち箱で一丁だよ

()内の歌詞は姿川にある。——部分の歌詞は豊郷、清原にはない。豊郷にはアの他にエの歌詞がある。

エ、お正月、二月、三月桜、桜の下におひめとじょうろがかみの毛をけばって、
(化粧して)どうこへござる、お江戸へござる、お江戸の道に毛のある鳥と
毛のないとりとくるりとまわって一丁よ(一っぼんよ)

()内の歌詞は篠井で歌われている。

(富屋には次の歌詞がある)

オ、一にたちばな、二にかきつばた、三にさくらばな、四にし(霜)しばたん、
五ついやま(つも)の千本桜、六つ紫き桔梗の花よ、七つ南天、八つ八重桜、
九つ小梅がちらちら落ちる、十で殿様おかごにのって御年始まえり
(してござる) ()内の歌詞は横川にある。

③お手玉歌(横川)

ア、一つがらがらへ戴せて、二つ山椒の木、三つ蜜柑の木、四つよいしゃの木、
五つ銀杏の木、六つ水連樹、七つ南天葉、八つ八重桜、九つ小梅の木、十で
栃栗、勝栗、甘茶栗

イ、一つとへ、俊徳丸は可愛想に、まま母様にいのられる

二つとへ、二親様があるなれば、お前は此様にせられまい

三どへ、三つのお年に母さんに、別れて合うのも辛いもの

四つとへ、餘所の人でも可愛さうに、涙を流すも無理はない

五つとへ、何時まで此の世に居たととも、どうして病気が直らうか

六つとへ、無理に勧めて、暇貰い、四国九州三界に

七つとへ、涙ながらの俊徳も、父さんさらばと暇乞ひ

八つとへ、山に寝やうか野に寝よか、狼猪は食はれうか

九つとへ、此所は何所かと聞いたれば、出雲の国だと人が云う

十とへ、十にもなったら母さんに、別れて逢ふのも辛いもの

ウ、さいりょの親父は車引き、酒屋の前まで五十銭、たかたたかい富士の山、
青空高し見下せば、汽車や電車でぼっぼっぼう

エ、一列だんばんはれつして、日露戦争ありにけり、さっさとにげるはロシアの
兵、五万の兵を引き連れて、六人残しの皆ごろし、7月8日の戦いは、ハル
ピンまでも攻入ってクロバトキンのくびを取り東郷大将万万才万万才

④まりつき歌(富屋)

ア、今日こんばん庄屋さんによばれて、鮭の吸物こだいはまやき、あさづけな
ますで、一杯吸いませよ、二杯吸いませよ、三杯目には名主の権兵エさんが、
お魚ないとてお腹をたつ、はてなはてなはてなはてな、おおさか、さかさか、
さかやでどん、四つやでどん、あすは赤坂、こうじまち、ちょろちょろなが
れるお茶の水、お茶とお水のまん中で、十七島田のねいさんが、おかごにの
ろうとまごついて、おや、ひー、ふー、みー、よー、いつ、むー、なな、や
ー、ここと、とうからくだったおいもやさん、おいもは一升いくらです。三
十五文にまけておけいまちとまけぬか、ちやからか、ほい、となりのおばさ
ん、ちっとおいで、いものころばし、めしあがれ、あたまを切るのはやつが
しら、しっぽを切るのは十のいも、おや、ひー、ふー、みー、よー、いつ、
むー、なな、や、ここ、とー

(横川には次の歌詞がある)

あれのお背中のおころ転んで、お茶碗こぼして、おもてのいちよか、イッサ
カドン、サイタカドン、とんとん様の鳴神の、ここは塩原酒屋のちょう、ひ
いや、ふうや、三や四、五六七八九十、ここは問屋の酒屋のかどか、馬が二
十四匹荷が二十四駄つけて渡さる問屋さん問屋さん

(4) 盆踊り歌(横川)

ア、盆の十六日仏様流す、家ちやせつなく質流す
イ、ここらあたりは山家故、紅葉のあるのに雪が降る
ウ、盆の十六日踊らぬ奴は、木仏、金仏(手なし、てんぽか)、石仏
エ、踊り踊る奴は肋骨足らぬ、側に見てる奴はなおたらぬ
オ、揃ろた揃ろたよ踊子がそろった、秋の出穂よりなお揃った

()内の歌詞は篠井で歌われている。城山にはウの他に次の歌詞がある。

カ、男伊達ならあの利根川へ、水の流を手でとめな
キ、出たよ出た出た南に雲が、わしもあのよに出でみたい

(ウの他に次の歌詞が富屋にある)

ク、見せてやりた徳次郎祭、馬場揃いのあの様を

(富屋) 踊るのりま

(富屋) 踊るのりま

① 鳶木遣り

ア. まなづる

宇都宮地方 (梁川新三郎口伝)

♩ = 56

(兄)ヨオ ヨオ ----- エンヤ レ ヨ (調)ヨオ ----- エ-----

イ. て こ

♩ = 56

(兄)ヨ イヤ レエ----- て - こ - おせ ----- (調)ヨオ -- ホオ

- -----エン ヤ -- ア ネ (兄)エ ごくろう-----

- だ ----- て - こ おせ ----- (調)ヨオ -- ホオ -----

エン ヤ ----- ネ (兄)エ たのみま - す ----- て - - - こ

おせ ----- (調)ヨオ -- -- ホオ ----- エ ンヤ ----- ネ

調「ヨオホオ エンヤネ」	兄「エ たのみます てこおせ」	調「ヨオホオ エンヤネ」	兄「エ ごくろうだ てこおせ」	調「ヨオホオ エンヤネ」	兄「ヨイヤレエ てこおせ」	調「ヨオ エ」	兄「ヨオヨオ エンヤレヨ」	まなづる
--------------	-----------------	--------------	-----------------	--------------	---------------	---------	---------------	------

②堀米の田楽

童謡 (2)

♩ = 100

笛

打楽器

歌

い --- け の み ぎ --- わ に つ る と か --- め

よ ろ ず よ ま で --- も か ぎ り --- な ---
3 (き --- み の め ぐ --- み --- ぞ)

き

- 池のみぎわに
つるとかめ
- よろずよまでも
かぎりなき
- 国もゆたかに
民草栄え
治まる御代の
ためしには
- 千代も経なまし
ひめ小松
きみのめぐみぞ
ありがたき

参 考 文 献

封

- 野仏 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 続野仏 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 宇都宮の寺院 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 宇都宮の文化財 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 日本の民俗・栃木 尾島利雄著 (第一法規出版)
- 栃木県民俗芸能誌 宇都宮市教育委員会編 (錦正社)
- 下野人の一生 宇都宮市教育委員会編 (下野民俗研究会)
- 下野の衣食住 宇都宮市教育委員会編 (下野民俗研究会)
- 栃木県の民俗 栃木県教育委員会編 (栃木県教育委員会)
- 民俗資料調査報告書第7集 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 下野の野仏 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 民俗資料調査報告書第9号 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 栃木県の強飯 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 民俗資料調査報告書第12集 宇都宮市教育委員会編 (宇都宮市教育委員会)
- 篠井における昔の年中行事 篠井町棒名松寿会編 (宇都宮市立篠井公民館)
- しのいの史跡 篠井松寿会連合会編 (宇都宮市立篠井公民館)
- 豊郷の民俗 宇都宮郷土研究会編 (宇都宮郷土研究会)
- 篠井の民俗 宇都宮郷土研究会編 (宇都宮郷土研究会)
- 栃木県わらべ歌・民謡集 栃木県連合教育会編 (栃木県連合教育会)

注

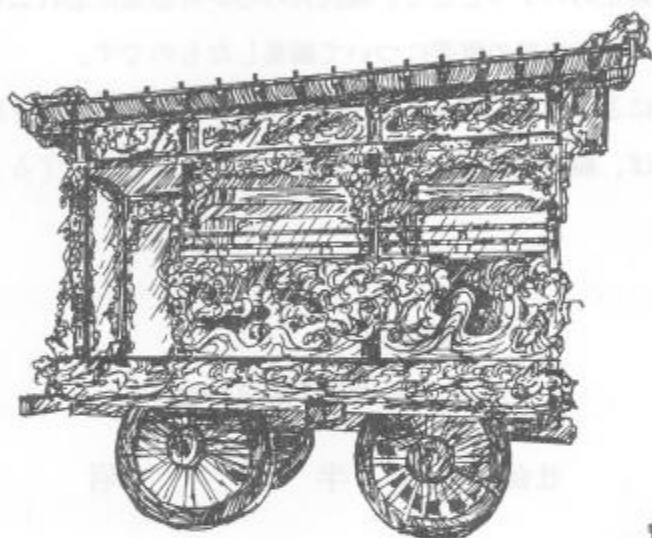
- ①宇都宮市統計書「昭和52年版」〈宇都宮市〉
- ②宇都宮市指定有形文化財（昭42・3・25指定）石祠の銅扇に刻まれている覚書は、徳次郎の地名起源を明らかにする貴重な金石文である。
- ③栃木県の民俗「栃木県民俗資料調査報告書第7集」〈栃木県教育委員会〉
- ④宇都宮市指定民俗資料（昭43・3・22指定）獣皮で作られた堂々たる火事装束であり、天保年間に使用されたものと思われる。
- ⑤③と同じ。
- ⑥宇都宮市指定民俗資料（昭31・6・3指定）柳材の臼（高さ65cm・直径60cm）で文化14年の名があり、一度に玄米一升程度を調整できたという。
- ⑦篠井の民俗〈宇都宮郷土研究会〉
- ⑧豊郷の民俗〈 〃 〉
- ⑨③と同じ。
- ⑩⑧と同じ。
- ⑪野仏〈宇都宮市教育委員会〉。掲載基準は同書の編集後記から。
- ⑫栃木県神社誌〈栃木県神社庁〉から作成。
- ⑬宇都宮の寺院〈宇都宮市教育委員会〉を中心にして作成。
- ⑭⑧と同じ。
- ⑮⑦と同じ。
- ⑯ 〃
- ⑰③と同じ。
- ⑱宇都宮誌〈田代善吉〉
- ⑲⑦と同じ。
- ⑳栃木県の強飯「栃木県民俗資料調査報告書第12集」〈栃木県教育委員会〉
- ㉑⑧と同じ。
- ㉒⑦と同じ。
- ㉓宇都宮の文化財〈宇都宮市教育委員会〉および宇都宮市教育委員会の「お囃子調査資料」から作成。
- ㉔宇都宮市教育委員会の「屋台調査資料」から作成。

㊥ここに掲載した(2)から(4)の歌詞は、宇都宮市の市史編さん室所蔵の次の郷土誌に所収のものである。

・清原村郷土誌 ・横川村誌 ・瑞穂野村郷土史 ・豊郷村郷土誌 ・城山村地誌
・城山村郷土誌 ・富屋村史 ・篠井南部郷土誌 ・篠井村郷土誌 ・姿川村史

なお、「篠井の金堀唄」は、篠井金山の抗夫たちによって寛文年間から歌われてきたものといわれており、昭和38年3月5日市の文化財に指定された。

㊦栃木県わらべ歌・民謡集〈栃木県連合教育会〉解説については、本文「11の(4)民俗芸能一覧のその他」参照。



山車 〈旧蓬来〉



天棚 〈瓦谷〉

あ　と　が　き

今日、私達の身の囲りには、欧米の生活様式がすみずみまで浸透しています。

合理的な欧米の生活様式を取り入れることは、日本国の発展に欠くことができないことであり別に非難されることではありませんが、このためにわが国古来からの伝統的生活様式をねこそぎ消滅してしまってよいのでしょうか。

子供達の多くは、日本人は古来から洋服を着、靴を履いていたと錯覚しており、親達の多くも昔の人々の様子を子供に話すことさえできない時代になりつつあります。

本冊子は、このような風潮の歯止めの1つとして、現代人の心から急速に忘れ去られようとしている郷土・宇都宮の民俗資料の概要について編集したものです。

この小冊子が多くの人々の目にとまり、「宇都宮の民俗」に対する理解と認識を深めるのに幾分でも役立ったならば、編集に携わった者としてこの上ない喜びとするところです。

昭和53年7月

編集責任者

宇都宮市教育委員会

社会教育課長 半 田 昭

昭和53年8月10日 印刷
昭和59年5月10日 第3刷
昭和53年8月15日 発行

宇 都 宮 の 民 俗

発行所 宇 都 宮 市 教 育 委 員 会

監 修 栃 木 県 立 郷 土 資 料 館
館 長 尾 島 利 雄

編 集 宇 都 宮 市 教 育 委 員 会 社 会 教 育 課
宇 都 宮 郷 土 研 究 会

印刷所 (有) イ リ サ ワ 商 事

(表紙題字・桜井敬朔、カット・定岡明義)



文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第1号